
past memory

真光 勇太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

p a s t m e m o r y

【Nコード】

N 2 3 6 0 W

【作者名】

真光 勇太

【あらすじ】

主人公武藤透也は、過去のある事件がきっかけで、人と一定以上の距離を詰めないようにしていた。だが、深い悩みを持つ友人たちに接し、それを解決していく中で、少しずつ成長していくストーリー。

？プロローグ（前書き）

第一章は出会いのシーンなので、少し我慢して、最低でも2章までは読んでください。

あと、スクロールは少なめにして、先読みをしないようにしてくださいね（笑）

?プロローグ

世界は嘘にまみれている。

そう、例え近しい人間でさえも信じきってはいけない。

俺は子供の頃にそんな当たり前のことを知ったし、それはこれからも変わることのない事実だと思う。

世界には犯罪が横行してるし、みんながみんな、犯罪者になる可能性を持っている。

……もちろん被害者にもだ。

自分の周りのやつは大丈夫だと、自分は大丈夫だと考える事がどれほど愚かなことか。

俺はそれをもっともその人の近くで見てきた。

……ただ、もし、信じれる……こんな世界でも信じる事の出来る、そんな人に出会えたら、俺も何か変わるのかもしれない。

そんな夢みたいないなことを何度か考えたことがあった。

だけどやっぱり、俺の頭からあの事は離れず、常に人に必要以上に近づかないように意識をして過ごしている。

人から避けられないように、人に近づかれすぎないように。

? プロローグ (後書き)

読んだ感想、ここはこういう風にダメだからこのように変えたほうがいい、などの意見をお待ちしております。

？出会いと始まり

桜が満開になりつつある四月の下旬、俺は家から最も近い公立の高校に進学した。

まあ公立と言っても学力的には上の下ぐらいのところで、一応進学校という程度のレベルだった。

俺は自分の偏差値から2つほど下のところ受けたので、正直入試は余裕だった。

ゆつくりと今日から自分の校舎になる学校を軽く拝んだ後、とりあえず俺はお決まりのクラス分けを見に行くことを決意し、人ごみの中をかき分けて掲示板のもとへ行った。

「えっと、俺のクラスは……」

掲示板に張り出されている紙に書いてある文字に目を滑らせていくと、1-Cのところ自分の名前が書いてあった。

俺は1-C……。

それだけを確認した後、自分のクラスの面子を一切見ずに俺は教室に向かって歩き出した。

普通の学生から見たら俺の行動は多少奇妙に思えるかもしれない。高校生っていうのは青春真っ盛りなわけで、どんな子と一緒にクラスになれるのか、中学校の時の友人が何人自分のクラスにいるのか、とかが普通は気になるものだろう。

だけど俺は気にならない。

だって……

「誰が同じクラスだったとしても、俺は変わらないしな……」

俺はずっとこんな考え方でやってきた。

それはこれからおそらくは変わらないだろう。

だけど……

「透也！ 待てって」

俺が考え事をしながら歩いていると、後ろから金髪ピアスのいかにもちゃらそうな男が走ってきた。

ニヤニヤしながら。

「……潤^{うる}か。久しぶりだな。どうしたんだ？」

「どうしたって、そりやないだろ？ 同じクラスになったんだから教室まで一緒に行こうぜ」

こいつは二木潤^{ふたきじゅん}。

去年、ちよつとした訳ありでこの町に引っ越してきたやつで、ちゃらいやつだ。

見た目と違って頭は結構回るんだがな。

俺は考えていたことを頭から振り払い、会話に戻った。

「そうなのか？ ……わかった」

俺はそんなそっけない言葉を選んで言った。

だけど、こいつは全く気にしてるようでなく、そのまま他愛もない話をし始めた。

こういつ明らかに不良のやつとの方が付き合いやすい。

俺は常々そんな風に思っていた。

「……裏が初めから見えている気がするからな」

「何か言ったか？」

俺のつぶやきが聞こえたようで、潤は自分の話していた話題を一度止めて俺に尋ねてきた。

「何でもないよ。お尋ね者君」

「お前なあゝ」

俺のそんな最低なセリフにもこうしてケラケラ笑いながら返事してくる。

こいつは、本当にいいやつだな。

この町に初めて来たときはあんなに眼がぎらついて、誰も寄せ付けない感じだったのにな……。

もちろん一人を除いて。

そんなことを考えながら廊下を歩いていると、いつのまにか自分たちの教室に着いていた。

さあ、今年も一年普通に過ごすか。

俺はしょうもない決意をして教室のドアを開けた。

俺は周りに自分から挨拶はせず、自分の出席番号の書いてある席に着いた。

今日は始業式の日なので、クラスでは誰が同じクラスだとか、そんなことでひたすらに盛り上がっていた。

俺はそこまで興味がなかったので、みんなの話を聞くわけでもなくただ座っていた。

そんな時、

「あ、透也！」

声を弾ませながら、一人の女の子が近づいてきた。

その子は、漆黑、そんな表現が似合うような黒髪のロングヘアの少女だった。

って……

「……えっ？」

俺は一瞬、その子を見たときに息が詰まってしまった。

ここにいるはずのない、他の子に見えてしまったからだ。

俺は自分の目を軽くこすりその子をもう一度確認した。

そしてようやく自分の間違いに気付いた。

「……ああ、来未くみか。おはよう」

彼女は三島来未。

俺の幼馴染の子で、特徴と言えば比較的ドジで比較的天然な比較的普通な子である。

あ、ちなみに髪は長い。

「ぷ」。反応が面白くない」

ぷって。

「ああ、まあ、久しぶりだな」

「うん、久しぶり！ 同じクラスになれたね」

「そうだな。ただ、俺はお前がこの学校だつてことを今初めて知つたよ」

「えっっつ！ ひどいなあ」

俺のそんな言葉に、一瞬驚いた後、またすぐに笑顔に戻って来未は返事をしていた。

「いつ戻ってきたんだ？」

「先月だよ。この学校に合格してから」

「そうか。結構ぎりぎりだったんだな」

「うん。受かるかわからなかったしね」

そついや、こいつは勉強があまり得意じゃなかったな。

「なるほどな。そついえばお前……黒髪にしたんだな」

「……うん。やっぱりこっちの方が私に似合うと思って」

俺はその言葉を聞いた時、すぐに思った。

——嘘だな。

だけど俺はそれ以上あえて突っ込まずに「そうなのか」とだけ言
ってそのまま来未が一方的に話す雑談をひたすら聞いていた。

……………

「……だけどね、やっぱり何を食べるにしてもはちみつは外せない
と思うの」

……何の話をしてたんだっけ？

さっきの久々の再会のシーンからまだ5分も過ぎていないのだが、
いつのまにか来未の周りには変な空間が出来あがっていた。

「昨日カレーを作ったんだけど、はちみつ抜きにしたらやっぱり何
か足りない気がして、それで……」

……はあ。

そういえばそうだったな。

来未は昔から何故かはちみつが好物で、話し始めると止まらないのだ。

だから俺は一言も口を挟まず、とりあえず聞き流す方針で座っていたが、そんな俺の状況を見かねたのかどうかはわからないが、横から潤が助け船を出してくれた。

「さすが来未ちゃん。はちみつについて語ったら止まらないねえ」

「あ、二木君。二木君もカレーにはちみつ入れるよね？」

「いや……俺は入れないかな？ それよりもコーヒーとか入れてビターな感じにした方が……」

助け舟じゃなかった。

……いや、それ以前に何か違和感があるぞ。
なんだ？

この妙な感じ、これは……

「そついや、お前らっていつの間に知り合ったんだ？」

俺の素朴な疑問に来未たちも納得したようで、笑いながら答えてきた。

「ああ、そういえばそうだね。透也は知らなかったね」

「俺が説明するよ、来未ちゃん。俺らは小6の時に同じクラスだったんだ。ほら、来未ちゃんこっちに転校して来ていただろ」

なるほど。

「だけど、よくお前らみたいな組み合わせで仲良くなったな」

「まあ、それはな……」

潤が何かを言おうとしたところでタイミング悪くチャイムが鳴り響いた。

始業式の間だな。

とりあえず俺たちは時間になったので体育館へ向かった。

体育館ではもちろん、例年通りありがたいお言葉を校長先生からいただいて教室に帰ってきた。

と言いたところだが、俺はさすがに面倒くさくなり、トイレと称して途中で抜け出して一番初めに教室に戻ってきた。

……そのつもりだったんだが、自分のクラスの前の廊下で女の子が一人窓から外を見ていた。

その子は金髪縦ロールの子で、どこから見てもお嬢様という感じだった。

外人かな？

俺はとりあえず関わり会いにならないように横を通って席に着こうとしたんだが、つい、その子のどこが寂しげな雰囲気を感じて見

てしまっていた。

「……何？」

ほんの数秒のことだったのだが、俺の視線に気づいて、その子から俺に話しかけてきた。

俺は、失敗したなと思いつつ、素直に疑問に思ったことを口にしてみることにした。

「いや…… 始業式に出なかったのかなと思って」

「…… ちょっと用事があったから」

「そうか」

ここは聞いたら深入りすることになるな。

そんな風に考えて、会話を切ろうとしたんだが、

「あなた、名前は？」

その子がそれを許してくれなかった。

「……俺の名前なんか聞いてもいいことないぞ」

「ふっ…… あなた、面白い人ね」

興味を持たれてしまった。

失敗したなと思いつつ、とりあえず返事だけしておいた。

「武藤透也」

「しのれな四乃麗菜よ」

日本人か。

俺が一人で得心していると、彼女は突然彼女の席に戻ってしまった。

気がつくと、続々とクラスの連中が戻ってきているところだった。
なるほどな。

俺は彼女の行動に納得し、見習って自分の席に戻った。

「おい、透也。今の女の子は誰だ？」

連中に混じって戻ってきた潤が俺に肩を組んで聞いてきた。

「四乃さん、らしい」

「知り合いか？」

「今知った」

「……お前が女子の名前を聞くなんてめずらしいな」

「聞いたわけじゃないけど……」

そんなことを言ったが、確かに自分でもめずらしく感じていた。

俺は基本的に人の名前は聞かないし、聞かれないというスタイルだったのだ。

あまり繋がりを増やしすぎる事に意味を感じないし、逆にリスクの方が大きい気がするから。

ただ、自分で言うのもあれだが、別に堅物と言うわけではない。人にボケもツツコミをするのも俺は厭わない。

……最後の一線さえ越えなければ。

「まあ、いいか。ところで今日家に来ないか？」

「……お前って確か今、妹との二人暮らしだろ？」

「ああ、今日はあいつもクラブがどうとかって少し遅くなるみたいだしな」

「俺の貞操が……」

「危なくねえよ！ お前って、人に深入りしない癖にボケが深いんだよ」

「そうか？ まあ、とりあえず遠慮しておこう」

「そうか……ってなんでだよ？！」

おお、これがノリツツコミか。

俺は感心した後、その場から立ち去った。

「待って！ リアルな話を言つとな、梓^{あずな}が会いたがってたんだよ」

「梓ちゃんが？ そっか……なら、わかった。ただし、一旦帰って

「からな」

「……それはわかってるって。それじゃ、また後でな」

「ああ」

そう言っ、俺たちは解散した。

家に着くと、母さんがいつものように寝込んでいた。

父さんが俺たちの世界からいなくなってから、あまり外には出ていないみたいだ。

まあ常に俺も監視してるわけじゃないから完全にはもちろんわからないけど。

「ただいま、母さん」

そう言っ、俺は帰りに買ってきたスーパーの袋から食材を出し、夕食を作り出した。

母さんがこういう状態だから、俺は出来る限り保存のきく料理を作ることを常に意識している。

ということで、今日の夕食はクリームシチューだ。

うん、我ながら中々いい出来だ。

俺は鍋の火を止めてから、仏間に入って行つた。
そして、父さんに届くように仏壇に向かつて手を合わせて目を閉じた。

俺と母さんの住む家は小さな借家で、今は俺のバイトと親戚の援助で何とか生計を立てている。

ただバイトの方は、行かなければ苦しい時は行くようにしているが、出来る限り家にいるようにはしている。

というのもやはり母さんが、父さんのいなくなった後体調があまり良くないからだ。

だから、普段は俺は友人ともあまり遊んだりしない。

まあ、今日みたいに向こうから誘われた時は別だが。

そんな感じで、俺、武藤透也は過ごしている。

俺は祈り終わるとゆっくりと目を開けた。

「ただいま、父さん。俺、高校生になったよ。母さんは相変わらずあの時からずっと寝込んだままだけど、俺が最後まで面倒を見るから、安心しといてくれ」

それだけ父さんに報告した後、俺は母さんにメモ書きを残して潤の住むアパートに向かった。

潤の住むアパートは、俺の住む家と学校の丁度中間辺りに位置し、とにかく……ぼろいアパートだ。

まさに、たおれ荘……。

俺は渾身のギャグを頭に浮かべた後、階段を上って行った。

部屋の前に着くとノックをし——もちろんインターフォンなどない——中からの返事を待った。

「どちら様ですか？」

中から可愛らしい女の子の声が聞こえてきた。

あれっ？

話が違つような……。

「お兄ちゃん？」

と、とりあえず返事をしないとな。

「えっと……そう、俺！俺だよ俺！」

自分なりに潤の声に似せて言っておいた。

「オレオレ詐欺ですか？　うちは間に合ってます」

しっかりした子だな……我が家にほしいぐらいだ。

……っていうかさすがにインターフォンで俺俺詐欺はないだろ、梓ちゃん。

「違う違う、透也だよ。武藤透也。覚えてるかな？ 久しぶり、梓ちゃん」

「えっ？ どうしたんですか？」

そう言っただけで慌ててドアを開けると、不思議そうな顔を俺に向けていた。

この子が梓ちゃんだ。

ツインテールの黒髪にまだどこかあどけなさの残るような女の子、という感じがな。

ホント、この子があいつと年子だなんて思わないよな。

……俺もか。

「いや、潤に聞いてない？ 何か梓ちゃんが俺に会いたがってるって聞いたんだけど」

俺がそう言っていると、梓ちゃんは何故か少し頬を赤らめて恨めしそうに「お兄ちゃんのやつ……」とだけ呟いていた。

「えっと、潤がまだなら俺は邪魔になりそうだから帰るけど……」

「邪魔じゃないです！」

いきなり声が大きくなったもんだから俺は少し驚いて、一歩引いてしまった。

「あ、いや、えっと……たぶんもうすぐお兄ちゃんも戻ってくると思うので、中で待ってて下さい」

「……そっか。わかった」

まあ断る理由もないし、俺はとりあえずうなずいて中で待つことにした。

梓ちゃんは俺が来るなり、せっせとお茶やらお菓子やらを準備し始めた。

ちなみに、俺は梓ちゃんの前では出来るだけつんとした部分は封印している。

というのは、初めて会った時に梓ちゃんが俺に怯えていたからだ。

まあ実際それだけなんだが……一応潤にも頼まれているしな。

俺も元はこんな感じの話し方だったから、そんなに気を使うほどでもないんだけど。

……ただ、馴れ馴れしすぎる気はするが。

「いや、本当に気をつかわなくていいから」

梓ちゃんが、俺が考え事をしているうちに次から次へとお茶やらお菓子やら遊。王カード？やらを出してくるから、俺は焦って止めていた。

「つかいます！」

……しっかりした子だ。

でも、遊び道具は少し考えてほしいな。
まあ、そんなことばかり考えててもしょうがないか。

「そういえば、潤が今日は梓ちゃんはクラブ活動とかで遅くなるって言ってたけど」

「え？ そんなことお兄ちゃんに言った覚えはないですけど」

……っていうことは、そういうことか。

「なるほど、騙されたってことかな」

「そうかもしれませんね。それに、私クラブ入ってませんし」

そこからか……。

まあ、この程度は嘘じゃなくて冗談の部類だよな。

「冗談を言う理由はわからないけど……」。

「理由も大体わかってますし」

えっ？

一瞬、心を読まれたのかと思ってドキッとしたが、そうではなさそうだった。

「それに、もうひとつ言えば……」

そう言つと、足音を鳴らさないように玄関に近づいて行き……勢いよくドアを開けた。

「いてッ！」

玄関から表を見に行くと、耳をおさえてもがいている潤がいた。

「やっぱり」

梓ちゃんがうんざりしたような顔で潤を見ていた。

「梓……もつと兄を敬え」

「お兄ちゃんこそ、くだらないことしないでよ」

「俺はお前のためを思ってたな……」

「だったら聞き耳なんて立てないでよ」

「……ごめんなさい」

兄の方が弱かった。

「ってか潤、お前もう6時前だぞ。ずっとそうやってたのか？」

「ふっ！俺を舐めてもらっちゃあ困る」

こいつ……やっぱり、ってかずっと思ってたけど、もしかして……

「馬鹿なんじゃないのか」

「透也さん、心の声が出てますよ」

おっと、危ない危ない、ナイスフォローだ梓ちゃん。

「ってか、何でこんなことをやってたんだ？」

「おお、よく聞いてくれた。それはだな……」

「言わなくていい！」

そう叫ぶと、梓ちゃんは瞬時に潤の背後に回り込んだ。
そして、潤の口……と鼻を封じた。

「んっ！ んっ……た……て」

潤は何かをずっと叫んでいたが、だんだん弱っていった。

「梓ちゃん、その辺にしとかないと潤が死んじゃうよ」

俺がそう言つと、梓ちゃんはようやく気付いたようで、潤は解放された。

だが、少し遅かったようで潤は何かを呟いて眠りに就いた。

………

……… たすけて、って言ってたな。

あとで、ようやく目を覚ました潤も交えて3人で他愛もない話を

して、そのままその日はお開きになった。

帰りに、梓ちゃんだけが見送りにアパートの下まで来ていた。

何で潤は来ないんだろ？

まあいいか。

とりあえずお礼だけ言って帰ろう。

「梓ちゃん、今日はごちそうさま」

「いえ、あのぐらいでよければいつでも来て下さいね」

「ああ、また寄させてもらおうよ」

俺がそう言つと、梓ちゃんは少し視線を下に落とし、何かを言いつらそうにしていた。

他の子なら絶対に尋ねないんだけどな。

「どうかしたのかい？」

俺がゆっくりとした口調でそう尋ねると、意を決したように梓ちゃんはこちらを向いた。。

「お兄ちゃん、学校でうまくやれてますか？」
なるほどな。

「ああ、うまくやってるよ。……俺よりもずっと……ね」

「そうですか」

実際、俺よりもあいつの方がずっとたくさんの友達ができている。

あいつはちゃらいけど、話したやつはみんな引き込んでしまうような魅力がある。

……本人には絶対に言わないが。

「……透也さんだけは」

「えっ？」

あまりに消えてしまいそうなほどか細い声だったので、思わず俺は聞き返していた。

「透也さんだけは、何があっても兄の友人であってあげて下さいね」

……この子が言いたいことは、わかってる。

この子はホントにいい子だ。

本当に潤のことを心配している。

いずれ、その時が来たときに、俺はいつたいどうするんだろうな。ただ……

「そのことで俺が友達をやめる事はないよ、あいつが俺に正直でいてくれる間は」

そう言っ、俺は梓ちゃんを不安にさせないようにできる限りの笑顔を作った。

梓ちゃんは俺の顔をみて安心したのか笑顔を作っ、て頷いてくれた。

「はい！」

？日常とわずかな変化

入学式が終わり、始業式の日、朝、俺は昨日と同じように学校までのひたすらに平坦な舗装された道の上を歩いていた。

学校までは自宅から徒歩30分程度で、特に変わり映えのない住宅街が続いているような場所だ。

中学も同じような距離……というか、高校から徒歩5分もかからないところにあるので、中学の時との感覚に特に変化はなかった。

「ちなみに、潤の妹の梓ちゃんはそこに通ってるんだな」

俺が自分で自分に解説をしていると、前に見知った顔、というか潤がいた。

「……誰に言ってるんだ？」

潤が少し冷めた目で俺を、校門の近くから見ていた。

「ああ、まあ誰でもいいだろ」

俺は適当に話題をそらすことにし、そのまま校門をくぐった。

「おっはよー！」

潤が元気よく中に入るのに俺も続く。

教室は、まだ2日目だというのにすでに仲良しグループがいくつが出来上がっていた。

その中の中心に来未の姿があった。

「……だよ〜！ やっぱりはちみつが……」

……また、はちみつについて語っていた。
んだけど、少し違和感があった。

これとは言えないんだけど、何か笑い方が昔と違うような……

「やっぱり来未ちゃんは、はちみつについて語ってる時が一番うれしそうだね」

潤は自分の席にかばんを置きながらほのぼのと来未を見ていた。

「……そうかな？」

俺も来未とは中学の時からあまり関わりあっていることが無かったから正直あまり自信がないけど。

だけど、やっぱり小学生の頃の方がもっと自然な笑顔だった気がする。

まあ俺の知っている頃の来未は潤とまだ知り合いじゃなかったから特に何も感じないのが普通なんだがな。

それに来未も、引越す前にごたごたがあったからな。

俺も丁度同時の時期に父さんの事件があつて、全くかまってやれなかったけど。

「まあ、透也君は付き合いが長いから違うように感じるのかね〜」

「からかうなよ」

潤はへらへらしながら俺をからかってくる。

こいつは中3の時にこっちに引っ越してきたから実質俺との付き合い自体はまだ1年目だ。

だけど、一番俺の事をわかっている奴だとは思う。

まあ、それでも、俺はこいつに俺のことを話してないんだけど。

そんなことを考えていると、朝会の予鈴が鳴った。

「席に着けよ。それじゃあ……」

先生がクラスに入ってきて、やっと高校の授業が始まろうとした。

授業は中学とそれほど変わりがなく、滞りなく進んだ。

授業の前に始業式があったんだがな。

4次限目の授業の終了の合図と同時に潤が俺に声をかけてきた。

「透也！ お前今日学食？」

「いや、弁当だけど」

「そっか、俺もだ。じゃあここで食うか」

「ああ」

潤はもともと俺の席の隣だったから、特に席を動かすでもなく、そのまま食べ始めた。

「あ、透也！ 私と一緒に食べていい？」

女の子のグループに囲まれていた来未が俺たちに近づいてきながら言った。

「いいけど……。他の子はいいいのか？」

「大丈夫。みんな学食みたいだったし」

「そっか」

俺はそれで質問はやめて、そのまま食べ始めた。

「来未ちゃん！ 俺もいるんだよ？」

「ああ、二木君も、お邪魔するね」

「はいはい」

来未の言葉に満足した潤も弁当を食うのを再開した。

「そういえば、二人とも弁当なんだね。……手作り？」

「俺は梓の手作り！」

潤が横から自慢げに俺に見せつけていた。

「そつか。梓ちゃんはやっぱり料理が上手なんだね」

来未の言葉に潤は満足そうにうなずいて、やっぱり俺に見せつけていた。

「ほしいか？」

「いらん」

「……梓に言つといてやる」

「いや、そういう意味じゃなくてだな……」

俺と潤のやりとりにくすくす笑っていた来未は、俺にも尋ねてきた。

「透也わ？」

「俺は……俺」

「透也の手作り!？」

俺が作っていたのがおかしいのか、何故かかなりびっくりしていた。

「えっと……ひとつもらっていい？」

「ああ」

俺の弁当からだし巻き玉子をとってゆっくりと食べた。

「これは……かなりおいしいね」

「……ありがとう」

料理を他人にほめてもらったのは初めてだったので少し照れくさかった。

「じゃ、じゃあ透也。お礼に私のおかずも……」

「いらん」

来未が言いきる前に俺は先に言った。

「な、何で？」

何でって……こいつ本気で言ってるのか？

「潤、言ってみてくれ」

「俺は……」

潤は言つべきか迷っているようだった。

「俺は……もらっぜ」

……食つべきか迷っていたらしい。

「マジでー!？」

俺の驚愕に来未は少し怒ったように言った。

「何で驚くのよ」

「だって……」

いや、だって……

潤が恐る恐る口に玉子焼きを含んだ。

……あんなにはちみつ見えてるんだもん。

「うお……。……来未ちゃん」

「なあに？」

来未はニコニコしながら潤の方を見ていた。

「……と、とってもおいしかったよ」

「やっぱり？ それ、この前はちみつ農園で取ってきたやつなの」

「そっか。どうりで……」

潤は口がまったりしてそうだったな。

その後も、俺は何とか食うことを拒否することに成功して、昼からの授業に通常通り望めた。

放課後になって、俺は今日は一人で帰ることにした。

帰りに、窓の前で昨日初めて会った時よりも少し悲しそうにして
いる四乃さんを見かけたが、俺は声もかけずに帰って行った。

？過去の出会いと新たな変化

夢を……

「はぁ……はぁ……」

夢を……見ていた。

あのころの夢を……

……

……

——「透也……すまん」——

「——っ！」

俺は気がつくど勢いよく布団を持ち上げて、身体を起こしていた。

「はぁ……はぁ……」

俺は周囲を見渡し、いつもと変わらない風景に少しだけ安堵した。

「夢か……」

俺は布団から抜け出し、いつものように朝食を作った後、
ジャージに着替えて朝のランニングに出掛けた。

まあ、朝のランニングは毎日ではないんだが、今日のように夢を

見たりして早く目が覚めた日には時間つぶしに出掛けるようにしている。

中学時代も陸上部だったので走るのそれはなりに好きだから、運動と言うよりも趣味という感じだが。

「でも……久しぶりだな……」

本当に久しぶりだな、と感じていた。

実際、学校が始まった日から数日がたっていたが、俺は一度も走りに来ていなかった。

というよりも、走りに来るきっかけ、つまり夢を見るということが全くなかったのだ。

「何でだろうな……」

実際記憶から少しずつ薄れていつてるのかもしれないし、今の学校の生活が妙にしっくりきているのが原因かもしれない。

忘れない程度に少しずつ和らいでいく感じ。

これが一番いいんじゃないかな。

……実際、もうあいつは生きていないしな。

そんな風に思いながら走っていると、いつものランニングコースの公園に着いていた。

まあ、来るまでも走っているんだが。

とりあえずいつものようにストレッチをし始めて少したったころ、近くで俺を呼ぶ声がした。

俺が振り向くと、光を照り返すように鮮やかなブラウンの長髪を

ゴムで束ねたジャージ姿の女の子が立っていた。

「おう」

俺が挨拶（？）をすると、その女の子は少し怒ったように口を膨らませた。

「おう、じゃないですよ！ 高校に入っても走りに来るって言つたのに全然来なかったから、もう来ないのかと思って……」

「いや、前も言っただけ俺が来るのは本当にたまたま早く起きた時だけだつて」

「それは、聞いてましたけど……」

そんな風に言いながら、まだ何か言いたげな顔をしていた。

この子は俺がランニングをしていた時に会った子で、走り方を教えてほしいと言われたから一緒にこうして練習に付き合っていた。

確か名前は緋香里^{ひかり}だったと思う。

何で名前なのかというと、この子が名字を覚えてくれないからだ。

まあ、そんなに呼ぶこともないので別にいいが。

そんな感じで、初めて会った日からランニングでここで会ったら一緒に走ろうということになっていた。

……正確には、半強制的に約束させられた感じだが。

「でも、連絡ぐらい入れてくれても……」

俺が色々昔のことを思い出していたら、そんなことを急に言って

きた。

「いや、でも俺、きみの連絡先知らないし」

そう。

実際、連絡用に携帯は所持しているが、二木兄妹と来未と家しか登録されていなかった。

「あ、そうでしたっけ？　じゃあ、私のアドレス送りますよ」

「そうか？　わかった。じゃあ走る日は連絡する」

アドレスに俺の名前が入っていないことくらいわかりそうな気がするんだが……。

だが、自分の考えすぎだと思い気にしないことにした。
とりあえず、赤外線でアドレスを交換した後、自分の携帯で確認した。

——飛野^{ひの} 緋香里^{ひかり}——

ディスプレイにそう登録されていたので、俺は尋ねた。

「飛野緋香里っていうのか。……っていうか、飛野って全然普通の名字じゃないか。何で教えてくれなかったんだ？」

「あ……。アドレスには名字書いちゃってましたね。……その名字は今のお父さんの名字なんですよ。私、今のお父さんより前の、実のお父さんの方が好きだったからつい……」

ゆつくりと、申し訳なさそうに喋っていくから、何だかこっちの方が申し訳なく感じてきた。

「あ、そうか。いや、何ていうか……悪いな」

「い、いえ！ そんな気にするような内容じゃないんですけど、ちよつと私の言い方が悪かったですね」

そういつて、自分の頭を少し叩いていた。

そこで会話が止まったので、俺から、本来やるべきことを切り出した。

「じゃあ、そろそろ行くか」

「はい、そうですね」

そこから、俺たちはいつもより少し短い時間だけ走って解散した。

飛…… 緋香里とランニングをした後、俺は学校に来ていた。

ランニングをする日は、どうしても時間が少し早くなってしまうので、だいたい中学の頃は一番乗りになっていた。

だけど、今は俺より早く来ている人が一人だけいた。

「よう！ えつと…… 四乃さん？」

自分で教室が2人目になるので、どうしても声を掛けずにはいら

れなかった。

四乃さんは、窓際に置いてある花に水を与えていた。

「あら。武藤君……だったわよね？ ……珍しく早いよね」

俺が早く来るのが珍しいことを知っているってことは、四乃さんはいつも早いんだろうか。

「ああ。今日は少しランニングをしてからきたから。このまま学校のシャワールームを借りるからな」

「へえ。武藤君はもっとおとなしいタイプの人だと思っていたわ」

どういう意味だろう。

ポジティブにとらえられない。

「まあ、中学の頃は陸上部に入ってたからな。走ること自体は好きだよ」

「そうなの。私も陸上部だったのよ。じゃあどこかで会っていたかもしれないわね」

「そうなんだ。俺は別にそんなに有名な選手でもなかったから、会ってる可能性は低いと思うけどな」

そんな風に返事しながらも、俺の方も少し四乃さんが陸上部だという事に驚いていた。

理由は単純に、見た目的にお嬢様〓茶道的な何かだというイメージがあつたからだが。

まあ、そんなことを言うわけでもなく、俺はこの前の事を思い出

したので尋ねる事にした。

「そういえば、何だか今日は元気そうだな。最近少し暗い感じだった気がしたけど」

俺がそんなことを言うと、四乃さんは少し驚いた顔をした。

「武藤君って、よく周りを見ているのね。それに……そんなこと、気づいていても言わない人だと思っていたわ」

確かにそうだ。

いつもの俺ならそんな突っ込んだことは絶対に聞かないのに……。

「そう……だな。何か今日は走ったから気分が高揚してるのかもな」

そう言って、適当にごまかすことにした。

「そう……。最近家は少しごたごたしていて、それが顔に出ていたのかもしれないわ」

「なるほどな。じゃあ、今は荷物を先に教室に置きに來ただけだからそろそろ行くよ」

俺は自分が相手に立ち入ったことを聞こうとしていたことに気づき、会話をやめて行くことにした。

ずっと持っていたカバンを机の上に置き、着替え用のナップサックだけを取り出して歩き出した。

「じゅっくり」

シャワーを浴びた後教室に戻ると、もうほとんどの生徒が来ていた。

もちろん……

「おい、透也ーッ！」

潤も来ていた。

ってか、こいつは不良のくせに遅刻とか一切ないんだよね……。

「どうしたんだ？ やけに反応が薄いじゃねえか」

俺が何も返事をしなかったから、少し怪訝そうな顔をしながら俺に向かって潤が言った。

「ああ、まあ、今日は久しぶりにランニングをしたから疲れててな」

こいつは、俺が陸上部だったことも、走ることが好きだったことも知っているから、俺は特に何も隠さずに話した。

「へえ、ランニングか……。お前が走るとこなんて、中学の時に一回ランニングに混ぜてもらった時に見たぐらいだな……」

「感慨深げに言っているけど、お前が一回混ぜてくれって言ったから混ぜたのに、途中であきらめて帰ったっていうおちの話だからな」

「うつせえなあ……。あれはお前が加減してくれなかったせえだろ。俺は帰宅部だつてえのに」

そんなことをぶつぶつと言っていた。

「まあ、また走りたくなったら混ぜてやるよ」

「はあ、そんなの……。まあ、透也が走りたくなったら言ってくれ。俺は付き合つてやるから」

「え？ あ、ああ。ありがとう」

俺がそんな風にお礼を言つと、こいつは急ににやにやとして言った。

「そつか……。お前でも感謝するんだな」

「しばくぞ」

こいつは、ホント癪に障るやつだな……

「冗談だつて。とにかく……。まあ、なんだ……。感謝は俺もしてるからな。……。って、気持ち悪そうな顔するなよ！」

いや、普通するだろ。
なるほど。

こいつの気持ちが少しわかった。

「まあとにかく、それは一応わかつといってくれ。あと、話が変わる

んだけどな……」

潤が前置きをして俺に何かを話しかけようとした時、ふいにチャイムが鳴った。

「……っと、もう時間か。昼休み、学食か？」

「いや、今日は弁当だ」

「だったら、屋上で食おうぜ。もちろん、来末ちゃんも誘ってな」

「わかった。来末には俺から声を掛けておくよ」

「おう、頼んだぜ」

そんな、特に何も無いような会話をして、朝の時間は終わった。

4時間目の終了のチャイムと同時に、俺は来末の机へと向かった。

「来末、今日は屋上で潤が飯を食いたいらしいんだが、お前も一緒に来るか？」

潤からは誘っておくように言われていたが、いつも来末も俺たちと一緒に飯を食ってるわけでは無いので、俺は、俺の中で当たり障りのない言葉を選んて言った。

「お、透也から誘ってくれるなんて珍しいね。うん、もちろん行くよ！ただ、今日はパンのつもりだったから先に二人で行っておいでもらってもいい？」

「ああ、わかった。じゃあまた後で」

来未の遠慮がちのセリフに返事した後、俺は潤を誘って屋上に上がって行った。

「おまたせ！」

俺と潤が弁当を半分くらいまで食べ進んだところで、来未が来た。

「あ、来未ちゃん！どうぞどうぞ、さあこのシートの上へ」

潤はあらかじめ用意していたシートの上に来未を座らせた。

来未は言われたとおりの場所に座り、買ってきたクリームパンとチョコパンに持参してきたはちみつをかけ始めた。

俺は、それを見て気分を害す前に潤に向かって話を始めた。

「それで、朝言いかけてたことって何だよ」

潤は俺の声を聞くと、手に持っていた箸を置いた。

「そうだね。この話をするにあたって来未ちゃんも呼んでもらったのは、女子の話は来未ちゃんが一番わかっていると思ったからなんだけど……」

そんな遠回しな前置きを言ってから話し始めた。

「まず、透也。お前、確か麗菜ちゃんと知り合いだったよな？」

麗菜ちゃん？

「それ、誰だ？」

「四乃ちゃんだよ、四乃麗菜」

「ああ、あの。お前すぐに名前で呼ぶ癖やめろよ。わかりづらい」

「別にいいじゃないか。減るもんでもないし。……で、その麗菜ちゃんのことなんだけど」

「ああ」

「実はな」

「ああ」

「……」

「……」

「……」

「いや、早く言えよ」

いつもはストレートに言うことが多い奴だったから、俺はじれったくなつてつい焦らしてしまっていた。

「まあ焦るなつて。とりあえず、来未ちゃん、女子の間での何かあの娘についての情報ってない？」

「情報かあ……。一応、みんなが知ってる程度のことなら」

「じゃあ、どうせ透也は知らないだろうから、そこから言っただけで」

失礼な。

と思つたが、俺は実際名前以外知らないの、黙っておくことにした。

「えっと、名前は四乃麗菜。親は救急救命医で、結構この辺では名医ということでは有名だったよね。……それで、ある時病院に救急で運ばれてきた人がいてね、その人がもう治療した時にはすでに遅くて亡くなつていたんだ。でも……ここからは正直よくある話なんだけど……その遺族の人がやっぱり納得しなかったんだろね。四乃さんのお父さんに対して裁判がかけられたんだ。ただ、詳しくは知らないんだけど、治療前に、インフォームド・コンセント（治療の説明）をしなかったって噂もあつて、よくわからないんだけどね。それで、もちろんまだ判決は出てないんだけど、その裁判が続いて精神的につらそうだ。って話ぐらいかな」

まさか、それほど深刻な話がでてくるとは思わなかったので、俺は黙って聞いていた。

「そっか。それは、俺も知っている話だね」

「マジで。結構有名な話なのか？」

「いや、有名と言うか、噂好きな奴とかはどうしてもこつこついう話をしたがるから、友達がある程度いる奴なら知ってると思うぞ」

「……まあ、俺はこの学校で友達、お前らぐらいだからな」

「そんなに落ち込むなって」

ニヤニヤしながら俺の肩を潤がつかみながら言った。

「それに、麗菜ちゃんもお前の友達だろ？」

まあ、そうとらえられないこともないか……。

「それより、この話は結構有名だった。ということは、お前が俺に話したいことは別にあるんだろ？」

俺がそう指摘すると、潤は少しおどけた感じになって言った。

「さすが透也。頭キレキレですな。……まあ、つまりはそういうことだ。実は、その四乃麗菜についての、変な目撃情報というか、そういうのがあるんだ」

「目撃情報？」

俺はよくわからない単語に、思わず聞き返していた。

「ああ。麗菜ちゃんの家は両親ともに救急救命医らしいんだ。……救急救命医って仕事は、基本的に家に対しては何もできない。家族は基本的に放任ってやつだ。忙しすぎるからな。それに極めつけは、四乃さんは一人っ子だ。これだけでわかると思うけど、多分、孤独なんだと思う。友達もあまり作らないタイプみたいだしな。それでかどつかは知らないけど……」

そこで潤は言いよんだ。

俺は、明らかに前ふりからいやな予感がしていたけど、とにかく黙って潤を見ていた。

来末もここからは知らない内容みたいで、真剣な顔をしていた。

「うり……やってるかもしれない」

「——っ！」

俺と来末は予想以上の内容にただ驚いた。

「うりって……売春のことだよな？」

「いや、ただの可能性だぞ。実際に現場を俺が見たわけじゃないし、学校でも全く噂になっていない。ただ、街に行くことがあって、そこで集まったやつらがたまたま撮っていた写真の画像があいつに似ていたんだ」

潤は最近になって、ネットで似たようなやつらとコミュニティを作って、そんな風集まることがたまにあるようになったって言う

ていたな。

「そ、そうか。来未はそういう噂は全く聞いたことがないのか？」

「う、うん。四乃さんとも何度か話したことあったけど、そんなこととするタイプの人には見えなかったし……」

来未も明らかに動揺しているようで、そんな風に言った後、何か考え込んでしまった。

「どちらにせよ、透也。お前はどつするつもりなんだ？」

潤が俺の瞳をまっすぐにみて、そう尋ねていた。

俺はもちろん……どうするべきだろうか。

確かにこのことが気にならないと言えば嘘になる。

ただ、ここでこの子のことについて調べるとするのは、必要以上に関わりあう事になるわけで。

そんなことをしていいんだろうか。

俺は人のためにそんなことをしてられる余裕があるんだろうか。むしろ、その人のためになるのかもわからないのに。

そんなことをただひたすらに頭の中で考えて、俺は中々判断できないでいた。

この世界には嘘、偽り、騙しが満ちている。ただ……だから、俺は……

「……調べるよ」

気がつく、そんな風に答えていた。

昔の俺を知っている来未は満足そうに、潤は少しだけ驚いたような反応をしていた。

「そっか……。お前がそうするってんなら俺は別に何も言わねえよ。ただ、何か手が必要だったら何でも言えよ」

「ああ、サンキューな」

こいつは基本的に頼りになるキャラだからな。ありがたく頼らせてもらおう。

「わ、私も！ 何かあったら言ってね」

「ああ、ありがとうな」

こいつは基本的に頼りにならないキャラだからな。ときどき報告をしておこう。

……というのはもちろん冗談で、ちゃんと報告しよう。

「うん！」

来未が返事をしたのと同時に予鈴が鳴った。

「よし！ じゃあ教室に戻るか」

俺がそういうと、二人とも頷いて弁当箱とシートを片付けたあと、教室に戻って行った。

帰りながら俺は、そういえば、来未の笑い方がマシになってきた

な。

とか、そんなことを考えていた。

午後の授業を終えるとすぐに、俺は四乃さんに声をかけた。

「四乃さん、今からもう帰り？」

四乃さんは、最後の授業の教材をまだカバンに詰めているところだった。

「ええ、正確にはアルバイトに行くのだけだね」

「アルバイトか……。どんなことやってるんだ？」

俺がそう尋ねると、四乃さんは少し驚いたように目を丸めていた。

「武藤君って、そういうことを聞く人だったかしら」

確かに、入学式から名前以外何も聞いてこない相手から、いきなりバイトのことを聞かれたら驚くのが普通なんだろうな。

俺もあんまり深入りするタイプにはなりたくないが、ここは状況が状況だけに仕方がないな。

出来るだけ変なことを口走らないように……

「いや、俺、四乃さんに興味があつて」

って何言ってるんだ俺！

あからさまにただナンパしてる、俺の一番嫌いなタイプの人間じゃねえか。

「そ、そう。……私、武藤君のタイプを誤解していたみたいね……」

ほら、ひかれてるし……。

「まあ、いいわ。気になるんならついてくる？」

「え？」

まさかそんな返答が来るとは思っていなかったので、素っ頓狂な声を出してしまった。

「え、あ、バイトって……いいのか？」

「ええ。そんなに変なバイトでもないし」

そう言っ、四乃さんが歩き出したので、俺はついて行った。

学校から出て、しばらく街に向かって歩くと、何とも言い難い雰囲気のところに着いた。

……というか、ホテル街に着いた。

っておい！

俺が心の中でつつこんでいると、

「……………」

まだ無言で、四乃さんは少しうつむいたまま、ただ歩き続けていた。

俺はただ、それに続く。

……………

結局ホテル街も通り抜けて、ある店の前にたどり着いた。
実際、学校からは20分程度だったと思う。

「えつと……………喫茶店？」

俺が不思議そうな顔をして聞くと、四乃さんは大きく息を吐いて言った。

「ええ……………。ごく普通の喫茶店よ。ここは立地条件のせいかわからないのだけど、学生でも時給がそこそこのいいみたいだから……………ただ、今来た道を通らないといけないのが難点なのだけだね」

そう言って、少し微笑んだ。

なるほど。さっき少しうつむいていたのは、照れていたからなの

か。

俺は一人でそう納得すると、四乃さんに向かって言った。

「えっと……俺も入らしてもらっていいのか？」

「ええ、もちろんそのつもりで連れてきたのだけれど……。ただ、私はただのバイトだから割引とかのサービスはできないと思うけれどね」

そう言つと、四乃さんはスタッフの入る側のドアに向かって行つた。

俺はそれを見送りながら、

やっぱり四乃さんは白だろうな……

と心の中で考えながら、店の中に入って行つた。

店の中は、シックな感じで、木を基調とした作りになっていた。俺は、近くにあった椅子に座つて、注文を見ていた。

何だか、少し高い気がしないでもないな……とか思っていたら、四乃さんが注文を取りに来た。

「いらつしゃいませ。ご注文はお決まりでしょうか」

どちらかといえば、淡泊な、そんな声を聞いて俺は注文をしようと顔をあげた。

……なぜか四乃さんはメイド服だった。

「いや……何でメイド服？」

俺が素直に疑問をぶつけると、四乃さんは首をかしげた。

「メイド服？ 研修期間が終わったなら、これが制服だって渡されたのだけれど……」

なるほど。どうりで、給料が高いわけだ。

でも、だとしたらお決まりのあれがないな……

「この店の服をメイド服だと考えたら、何だかセリフが足りない気がするんだが……」

俺は店からの一連の流れで、そういったセリフがなかったな、と思っていた。

いや、決して求めているわけじゃないけれども。

「ああ。何だか、そういえば、他の店員さんはお客に頼まれた時だけ何かやっていたわね」

「四乃さんはやらないのか？」

「ええ。店長が、とりあえずツンツンしといて！ って言ってた気がするんだけど、意味がよくわからなかったからそのままやってるわ」

なるほど、天然でも全然やっていけるということか。

「それで、注文はいかがなさいますか？」

「じゃあ、俺は……」

そんなこんなで、俺は適当にオムライスを注文して、帰って行った。

帰り際に、四乃さんに働いている曜日と時間だけ聞いて帰った。

？安堵と動揺

次の日、俺は昼休みに来未と潤を集めて屋上で報告会をやっていた。

「……っていうことだから、大丈夫じゃないかと思うんだ」

「いや、まだ何も話してないじゃん」

「……」

俺はひとまず無言になった後、本題に入ることにした。

「まあ、とりあえずだな……」

俺は昨日のことをありのまま伝えた。

全部聞き終わった後、来未は笑顔になって言った。

「そっかあ。じゃあもう大丈夫なんだね」

「ああ、ただ、行くまでの道にホテル街があったからあんな噂がたつたんじゃないかと思うんだ」

俺は全部話し終わって安堵した顔をして潤を見ると、潤はまだ何かを考えるようにしてうつむいていた。

「……どうかしたのか？」

俺がそう尋ねると、潤はゆっくりと顔を上げた。

「いや、でもそれっておかしい気がしないか？」

「……何がだよ」

俺は何を言われているのかよくわからなくて、少しづつきらぼうに言った。

「いや、別に俺も疑っているわけじゃないけど……、違うな、疑っているからこういう事を言っただろうな」

遠まわしに、そんな含みを持ったセリフを言った後に話し始めた。

「透也。お前の話を聞くと、やっぱりそのバイトは、四乃さんは確かにやっていると思うんだ。だけど……やっぱりおかしい。そのバイトは学校が終わってから20時までなんだよな？ それに、日曜日にはやっていない。そういうことだな？」

「……ああ、昨日聞いた時にはそう言っていた」

潤はそう言うと、おもむろに携帯を取り出していじり始めた。

そして、あるページで手を止めると、その画面を俺たちに見せた。

「これ、どう思う？」

そこには、夜の繁華街を女性と男性が二人で並んで歩いている姿が写っていた。

ただ、周りにたくさんの人がいたことと、かなり遠くから撮影した画像だったから、俺にはよく見えなかった。

だけど、それは……

「四乃さん……か？ いや、でも、違うか。似ている感じは確かにあるんだが……。あの人が、こんなに露出の多い服を着るとも思えないし」

俺がそう言うと、横で来未も頷いていた。

「俺もそう思ったけど、でもやっぱり気になったから一応、お前と来未ちゃんにも確認しておきたかったんだ」

潤はそう言うと、俺と来未が明らかに疑問に思っていることを言い始めた。

「これは、昨日言ってた画像を送ってもらったんだよ。そいつは、別にもう興味がなかったみたいで、消しかけてたみたいけどな。……それで、俺はこの画像を撮った日にちを確認したんだ」

そこで、潤は画面を変更する。

「その日にちつてのが先週の……日曜日の夜10時」

「——っ!!」

俺と来未は同時に息を飲んだ。

もしかしたら……っという可能性が出てきてしまった。

「で、でももしそうだとすると、何で……」

俺は少し声が震えていたかもしれない。

「落ち着けつて。俺だつてそんなこと、わかるはずがないだろ？
家が大変な時つて言うのは、俺たちよりもよっぽどわかっていると思っしね。それに、まだこれが100%彼女だと決まったわけでもない。俺も、また、それとなく情報を集めておくよ」

潤はそう言つと、そそくさと弁当箱を片付けて戻つて行つた。
来未は心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「だ、大丈夫だよ。四乃さんのことはよくわからないけど、そんなことする人じゃないと思う」

「……ふっ。来未に慰められてたら世話ないな」

俺が少し笑つてそういつと、来未も安心したように笑つていた。

「とりあえず、今回は噂が全く広がってないみたいだから、来未は変な噂がたたないように気をつけておいてくれ」

「うん。わかつた」

俺たちはそれだけ話すと、教室に戻つて行つた。

放課後になると、俺はまた四乃さんに話しかけに言つた。

「四乃さん。今日もバイトか？」

「いいえ、今日はこのまま家に帰るつもりだけれど……。どうかしたの？」

今日はない日か……。

ここであんまり深入りしても変に疑われそうだな。

「そうなのか。ああ、いや、別に変な意味はないんだけど、四乃さんのメアドを聞いてなかったな、とか思ってた」

俺がそう言っていると、四乃さんは何も言わずカバンから携帯を取り出した。

「赤外線でもいいかしら」

「ああ、うん」

そうして、お互いに交換した。

「ありがとう。……寂しくなったらメールでも何でもしてくれ」

俺がそう言っていると、四乃さんは微笑んでから帰って行った。

……さて、じゃあ次は日曜日が仕事だな。

？孤独と涙

日曜の朝、俺は来未と四乃さんの家の近くに来ていた。初め、来未を誘った時は驚いていたな。

まあ、誘った理由はかなり簡単な話なんだけど。

1つ目が一人でつけてストーカーと間違われたら最悪だからだな。そして2つ目が四乃さんは基本的に一人で行動するみたいなんだけど、女の子しか入りづらい店に入られたら困るからだ。

そのことをちゃんと来未に伝えて了承してもらった。

「……なかなか出てこないね」

俺の隣でじつとしていた来未が、少し疲れたようにそう言った。

「ああ、まあ、今日移動するかもわからないしな。それに、移動するにしても夜だけかもしれないからな」

俺がそういうと、「そっか」と言っで、また無言になった。

……そういえば、こいつと二人になるのもなんだかねで久しぶりだな。

俺は来未の横顔を見ながらそんなことを考えていた。

こいつは、転校する前に色々と問題があったからな。

俺は、俺のことで手いっぱいこいつの問題を転校するまで全く知らなかったけど。

……聞いても、大丈夫だろうか。

「なあ、来未」

俺が、遠慮がちに話すと、来未はこちらを振り向いた。

「なあに？」

「えっと……。お前の家、どんな感じなんだ？」

俺はかなり遠回りな聞き方をしたが、来未は直ぐに意図を読んできた。

「……大丈夫だよ。透也の家よりわね」

そう言つて、少しはにかむように笑った。

「そっか。その……。今さらだけど、あの時はすまなかったな」

「あの時？ 別に透也は何も悪いことしてないじゃない」

「ああ、いや、そう言つ事じゃなくて……。そういえば、おばさんは元気か？」

俺がそう言つと、来未は少し思案するように目を閉じた。

…… 4年前、こいつの家族は旅行に行くことになっていたらしい。

こいつは、母親と仲があまり良くなかったみたいで、旅行に誘われたことを結構喜んでいたらしい。

実際、仲が悪い所など、俺には微塵もわからなかったのだが、母親もながいこと一緒にいたから、来末に少しずつ寄っていかうとしていたのかもしれない。

だけど、その時にあの事件は起きた。

来末の家族は交通事故にあったのだ。

高速の途中で、前のトラックが急に停止をしたらしい。

原因はエンジンのトラブルらしいのだが、俺も詳しくは聞いていない。

その時に、後ろを走っていた車を運転していたこいつの家族がそのまま衝突してしまったのだ。

そこで、こいつとおばさんは奇跡的に一命を取り留めたのだが、こいつの親父さんとお義姉さんが亡くなってしまった。

義姉、というのは、実はこいつは父親の連れ子で、義姉の愛美さんはその再婚相手の今のおばさんの連れ子だったからだ。

愛美さんは、才色兼備という言葉がまさにしっくりくるような、はたから見ると完璧な人だった。

もちろん、完璧なんてありえないと個人的には思うが……。

そのせいもあってか、おばさんはかなり溺愛していたようだ。

確かに、今から思えばおばさんの溺愛っぷりは少し以上だった気がしないでもない。

だけど来末と愛美さんはかなり仲のいい義姉妹だった。

もちろん、これは俺の主観なんだけどな。

年は3つ離れていたから、俺は愛美さんと遊んだことはほとんどなかったんだけど。

ちなみに、おばさんとあまり仲が良くなかったっていう話は、潤

から聞いて、来未に直接聞いたことがある。

……何で潤がそんなこと知ってるんだ？

「うん。お義母さんももう元気になったよ！ ……あたしもよく話すようになったし」

「……そっか。よかった……とは言えないけど、でも、打ち解けられたことはよかったな」

「うん。それに、謝る必要はないよ。透也だって……」

来未が何かを話し始めようとした時、四乃さんの家の玄関が急に開いた。

四乃さん……一人か。

「出掛けるみたいだな」

俺がそういうと、横で来未が頷いていた。

俺たちは、出来るだけ自然に後ろについて行った。

……

四乃さんは、本屋に入って行った。

そこでは俺たちは接触しないようにとりあえず出入り口の所で待っていた。

しばらくすると、一冊の小説を手に持った四乃さんが出てきた。そしてそれを持って別の場所の喫茶店に入って行った。

どうやら普通に読書するみたいだな。

「……っていうか、休みの日に喫茶店で読書って……見た目通りじゃねえか」

俺のつつこみを横で聞いていた来未は、砂糖を大量に入れたコーヒーを飲んでいた。

「本当に、こんな女子高生存在するんだねえ」

「まあ、お前は本なんて読まないもんね」

俺がそうからかうように言うと、来未は頬を膨らませて怒ったようなしぐさをしていった。

「失礼な。私だってちゃんと読書くらいするよ」

「ほお。じゃあ、一月に何冊ぐらい読むんだ。もちろん、学校の教材は抜きでな」

「……う、5冊くらい……っかなあ」

明らかに嘘っぽい口調を聞いて、俺は自分の中のSつけがマツクスになるのを感じていた。

「なるほどな。俺は1冊読むか読まないくらいだな。来未は凄いなあ。本当に、学校の教科書とか読むのも俺はしんどいつていうのに。……で、たとえばどんな本を読むんだ？」

「え、えつとお……あ、アラ。ンとかあ……」

……ぷつ。

「ば、バン。ヨーとカ。ーイの大冒険とかあ……」

……ぷぷつ。

「ゴ。モンとかかな」

ぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷつ。

俺は心の中で大爆笑していた。

いかんいかん。ここで笑って四乃さんにばれたら全てが台無しだ。

絶対に笑わないようにして対応しないと。

「そ……そつか。……ぷぷつ。ば、バン。ヨーとカ。ーイの大冒険を読んでるのはさすがだな。……ぷぷぷつ。ま、また今度貸してくれよ」

俺は顔をびくびくさせながら、何とかセリフを言いきった。

「う……うん……」

来未は俺の反応を見て、自分のミスに気づいたんだろうか、赤く
なつて下を向いてしまった。

いかん、いかん。また本業を忘れるところだった。

っていうか、時間がもう6時になっていた。

「おい、来未。確か7時から10時までバイトだったよな？　ここ
までで十分だぞ」

「う、うん。そのつもりだったけど、やっぱり気になるし……」

「いや、でももしかしたらこのまま帰るつもりかもしれないし、お
前はやっぱりバイトに行ってくれ。明日にまたちゃんと報告するか
ら」

俺がそう言うと、しぶしぶ納得した感じで頷いてくれた。

「うん、わかった。……じゃあ、また明日」

「おう。……言っとくけど、ばれないように帰ってくれよ」

俺がそう言うと、抜き足、差し足、と言った感じで帰って行った。

まあ、今日が休日だから店内がかなり混んでるからあんなことし
なくても問題はないんだけどな。

ちなみに、来未はコンビニの店員な。

似合ってたな。

あの地味さ。

俺はそんなことを考えてその場にいた。

店が7時あたりから少し空いてきたので、俺はばれないように先に出ておいた。

少しすると、ラッキーなことにすぐに四乃さんも出てきた。

さて、ここからがラストだな。

俺は気合いを入れなおして尾行を続けた。

……………

四乃さんは繁華街のかなり人通りの多い道を選んで歩いていた。

俺は、歩く人にもみくちゃにされながらついて行っていた。

しかし、ここはこの時間になるとこんなに込むんだな。

俺は、自分の家から少し離れたここがこんなに都会っぽい状態になるとは知らなかったので、少し感心していた。

なるほどなあ……………。

だけど、俺はあまり好きにはなれないな。

そんなことを考えて、尾行を続けていたんだが……………人ごみを抜け

出した時に、四乃さんの姿が消えた。

「——しまった！」

どういうことだ。

ずっと一定の距離を保っていたのにいきなり消えるなんてことがあるとしたら……

「尾行がばれていたのか——」

俺は慌てて考えうる出来るだけ危なそうな道に向かって走って行った。

「……くっ、どこだ？」

どこを見ても同じような風景が続いているので、正直嫌気がさしていた。

田舎に住んでいたのに、いきなり上京してきた人の気分がわからない。

そんなふざけたことを考えて十字路を左に曲がった時

「——っ！——！」

四乃さんを見つけた。

——知らない男と二人で歩いている四乃さんを。

丁度、四乃さんは、男から現金のような封筒を受け取っているところだった。

「……マジかよ」

俺は驚きすぎて、唾が喉を通らなかった。
そうしているうちに、四乃さんたちはまた歩きだした。

ど、どうする？

俺は必死に思考を巡らせた。

さすがにこんな経験はない。

この際、このままつけて、現場で抑えてしまおうか。
……って、現場って何だ。

それは実際にそうなのかもわからないし。

「……谷内さん、今日は……に行く？」

「ああ、あまり……に行かな……とな」

俺が思考を巡らせているうちに、二人は話しながら少しずつ離れて行く。

——もう、行くしかない。

俺はそう考えると、人ごみの中をダッシュで駆け抜けながら、叫んだ。

「四乃さん！……！」

ゆつくりと繁華街を通り抜けていた二人は、どうやら俺の声が聞こえたようで、驚いたようにこちらを振り向いた。

俺は追いつき、少し呼吸を整えながら隣にいる男を見ていた。

男は、中肉中背よりやや肥満と言う感じで年齢は40前後と言う感じの人だった。

「し、四乃さん、何考えてんだよ。こんなことしたって、意味ないじゃないか。いや、いきなり意味ないとか俺が言える事じゃないけど。それでも、他には何も方法がなかったのかよ。エンコーなんかしなかったってちゃんとバイトだってしてるじゃん」

俺が、そんな、動揺したように言うと、四乃さんは焦ったように言った。

「ちょ、ちよつと、武藤君？　あなた何か誤解してない？」

え？

どういうことだ？

「う、誤解？　……ってどういうこと？」

「エンコーって……この人は私の伯父に当たる人なのよ」

「お、伯父さん？」

俺は四乃さんの隣にいる男の人の顔を見た。

……似てない。

まあ、いとこの伯父さんに似てるわけではないけれど。

男の人はそんな俺を見てしきりにニヤニヤと笑っていた。

「そうよ」

お、伯父さんか……

「だから、たぶんあなたの思っているような展開にはならないと思うのだけれど」

そう、四乃さんはくすくすと笑いながら言った。

なるほど、それなら確かにさっきお金のようなものを受け取っていたのにも納得できる。

「まさか、あなたに心配されるとは思わなかったわ」

そう言って、四乃さんは何故だか少し嬉しそうにしていた。

なら、誰に心配されると思っていたんだろう？

俺は、こんなタイミングでそんなことを考えていた。

「でも、ありがとう。じゃあ、そろそろ行くわね」

そう言って、いつもより少し饒舌になっていた四乃さんは踵を返した。

そんな四乃さんに、俺は何と声をかけようか迷っていた。

まだ少し言いたらないことがあったからだ。

それに、嫌だったけど、まあこっという展開になることも予想してたしな。

——潤、助かったぜ。

俺は少し自嘲気味に笑うと、四乃さんに向かって、俺の出せる出来る限りの大きな声で叫んだ。

「嘘をつくな！！！」

こんなに騒がしい通りで、周りの人が反応するくらいに俺の声は大きかった。

四乃さんは、俺の声にびくつと身体を震わせると、俺の方に向きなおした。

「う、嘘……？ な、何で……？」

さっきまでの饒舌ぶりとは打って変わって、今度は少し声が震えているように感じられた。

さっきのはおそらく、誰かにばれたときにある程度言う事を決めていたんだろう。

だから、あれだけ饒舌だった。
だけど……

「さっき、その人のことを呼んでいただろう？ 谷内さんって……」

俺はさっき聞こえていた会話を思い出していた。

そう、念には念を入れて、俺はその人の名前だけは聞き逃さないように注意して聞いていたのだ。

「え、ええ……。それがどうしたの？ 私の母の性が谷内……」

「じゃないだろ？」

まさか本当にこんなしょうもない手を四乃さんがつかつてくるとは思わなかったけど、本当に聞いたというてよかった。

俺は潤からあらかじめそういったもののあらゆる情報はもらっていた。

……というか、俺から言ってもらっていた。

「まさか、四乃さんがそんなことを言うと思ってなかったけど、一応調べといてよかったよ」

俺がそう言うと、四乃さんは唇を噛みしめるようにして立っていた。

「とにかく、俺は君を連れ戻すよ。おじさんも、警察を呼ばれなくなったらさっさと消えてくれ」

俺がそう言うと、さっきまで忌々しそうに俺の方を向いていたのが嘘のように、そそくさとそのままカバンを持って立ち去って行った。

俺はそれを横目で確認した後、四乃さんの瞳を覗き込むようにして言った。

「さあ、行こう」

だが、俺が手を伸ばすと、四乃さんはそれを振り払うようにしてバッグを俺の方に投げ、突然走り出した。

「ごめんなさい！」

俺は四乃さんのバッグを拾った後、慌てて追いかけた。

「四乃さん！」

俺は叫びながら、人ごみをかき分けて行く。

当たり前だが、通りを通る人は全く道を開けてくれない。

俺より小柄な四乃さんは俺よりも早くぐんぐんと道を抜けていく。

「……まずいな」

俺は今しか彼女を変えられるチャンスはないと心の底で感じていた。

だから、とにかく息がただけつらくなくても追いかけると決めていた。

そのうち、人ごみを抜けて普通の住宅街の通りになってきた。

ひたすらに見失わずに走り続けていたおかげで、俺は四乃さんの向かっている先が大体わかってきた。

「この方向は……家か」

俺は正直、親がいたらまずいなと思いながら追いかけていた。もしも親がいたらこの状況を見たのに驚いて俺に追及してくるか

もしれないし、何より四乃さんの今の精神状態じゃどんな行動をしでかすかわからないからだ

まあ、それ以前になにより……

「四乃さん速いな」

俺は今になって最近のランニング不足に後悔していた。

四乃さんは毎日走ってそうだな。

確か前に聞いたときに陸上部だと言っていたはずだ。

俺とは違っていい成績を残してたんだろうか。

そんなことを考えながら全力疾走した。

………

しばらく走り、四乃さんの家の本当に正面に来た時に俺はようやく追いつき、彼女の左腕を掴んだ。

「四乃さん……はぁ……はぁ……家に帰った方がまずいだろう？」

四乃さんは俺に手を掴まれながら、ただうつむいていた。

俺は、四乃さんの腕を掴んだまま、家を見た。

——家は真っ暗だった。

まだ帰ってないのかな？

俺は心の中でそんなことを考えながら、逆の手に持つバッグを確認した。

どうやら故障はしていないみたいだ。
よかった……。

俺は、ようやく呼吸が整ってきたので、四乃さんにバッグを返そうと左手を前に差し出そうとした。
その時、四乃さんは突然話し始めた。

「親が……こんな時間に帰ってくるわけないでしょ？」

四乃さんは、いつものお嬢様口調ではなく、普通の一般家庭の女の子のような話し方だった。

俺は自分の疑問を、出来るだけ端的に質問した。

「今日が、日曜日なのに……？」

「そうよ。そういう仕事じゃないんだから」

「……………」

俺は何も返事をしなかった。

それは、彼女が俺の返答を待っているわけじゃないと思ったからだ。

少し震えた声で、彼女は話を続けた。

「……だから、私はいつも一人」

俺は彼女の腕を握っていた手をおろし、彼女の手を掴んだ。

「わかってるわよ……こんなことしても意味がないって事くらい……」

彼女は、俺の手を少しだけ強く握ってきた。

「でも……それでも、私は……」

俺の手を握ったまま、涙を眼にためて俺の方を振り返った。

「——寂しいのよ……」

そう叫ぶと、今まで流れていなかった涙が彼女の目から次々と流れでてきた。

ああ……

そういうことが……

俺は心の中で納得していた。

やっぱり、お金のためじゃなかったんだな。

この子もまだ15歳なんだ。

今までずっと寂しさに耐えてきて、こういう事をしてでも、親や

誰かに振り向いてほしかったんだな。

そんな風に考えると、俺の中に同情とはまた違う、別の何かの感情が生まれてきた。

「……………」

そして、俺は言葉も発さず、ただ彼女を抱きしめた。

「——えっ？」

そりゃいきなり俺みたいなやつに抱きしめられたら驚くだろうな。でも、そんなことわかっていても、俺はこうせずにはいられなかった。

「……………武藤……………君？」

「ごめんな……………。何も気づいてやれなくて」

俺が言葉を発し始めると、今度は四乃さんの方が黙った。

「寂しかったん……………だよな。いつも一人でいるような気がしてたんだよな……………」

抱きしめていた四乃さんが、少し震えた気がした。

「でも……………駄目だろ？ あんなことしちゃ。ご両親がたとえ気づいてくれなくても……………俺が……………俺たちが悲しいよ」

俺が言葉を発するたびに、俺の腕の中で四乃さんは少し震えなが

ら頷いていた。

たぶん、こつやって誰かに叱ったりかまったりしてほしかったんだろっな。

「でも、四乃さんはもうあんなことする必要はないよ?」

「——え?」

本当に消え入りそうな声だった。

「だって、四乃さんはもう一人じゃない」

四乃さんはゆっくりと顔を上げて、俺と目線があった。

「俺たちはもう友達だろ?」

四乃さんは今までで一番大きく声をあげて泣いた。

.....

しばらくして四乃さんが泣きやむと、俺たちは四乃さんの家の玄関に移動した。

……途中で通りがかった警察（おそらく通報）に、説明するのがたいへんだったからだけだな。

そこから、俺たちは1時間程度玄関で話した。
もうそこから動く気がなくなっただからだ。

……四乃さんが、だけどな。

四乃さんは、援助交際もどき？をしていただけで、本当に交際だけだったみたいだ。

しかも、本人が言うには比較的安全そうな人を選んでたとか。そんなのできるのか？

とか思っただけ、俺は、身体を売っていなかったただけでも本当によかったと思っただ。

「だから、私処女よ」

なんて、かなりヘヴィなボケもやられたけれども。

ちなみに、現在裁判になっているのは親父さんの方らしく、母親の方は今日も仕事らしい。

父親は友達とかけあつて、いろいろな情報を毎日集めていて、結局帰るのが遅いらしいんだが。

そんな会話をしていると、四乃さんが驚くようなことを言った。

「私、正直裁判になって嬉しかったの」

「え……？」

「だって、これで、もしかしたらお父さんが少しでも家を省みてくれるかもって思って」

「……そっか」

でも、駄目だったんだろうな。

親がいても幸せになれない家庭なんていくらでもある。

逆に、親がいなくても幸せに過ごせる家庭もたくさんある。

世間では親のいない家庭、養子に入れられた子供のことを不幸だという人が多いけれども、本当は何より身近な存在から愛情をもらえていない子供が一番不幸なんじゃないかなと俺は思う。

ただこの四乃家の家庭は、救急救命士として他の人を助けることはできても、自分のたった一人の最愛の娘を助けていない。それは、仕方のないことだという人はたくさんいると思う。だけど、俺はそれは仕方ないことじゃないとみんなが言えるようになれば変わるものだとも思う。

ただ、今は……この子は、俺たちが寂しさを紛らわせてあげられたいいなと俺は思う。

「じゃあ早速、明日から俺らと一緒に弁当を食うか？」

俺が、いしし、という風に笑いながらそう言うと、彼女は少し驚いたような顔をして、そのあとに最高の笑顔を見せてくれた。

「
うん
!」

？
優しさと涙（前書き）

二章？の分岐です。

こっちの設定にしようかずっと迷っていたので、一応投稿してどちらの流れのほうがよいかを判断していただけたらと思います。

？
優しさと涙

日曜の朝、俺は来未と四乃さんの家の近くに来ていた。
初め、来未を誘った時は驚いていたな。

まあ、誘った理由はかなり簡単な話なんだけど。

1つ目が一人でつけてストーカーと間違われたら最悪だからだな。
そして2つ目が四乃さんは基本的に一人で行動するみたいなんだ
けど、女の子しか入りづらい店に入られたら困るからだ。
そのことをちゃんと来未に伝えて了承してもらった。

「……なかなか出てこないね」

俺の隣でじつとしていた来未が、少し疲れたようにそう言った。

「ああ、まあ、今日移動するかもわからないしな。それに、移動するにしても夜だけかもしれないからな」

俺がそういうと、「そっか」と言っで、また無言になった。

……そういえば、こいつと二人になるのもなんだかねで久しぶりだな。

俺は来未の横顔を見ながらそんなことを考えていた。

こいつは、転校する前に色々と問題があったからな。

俺は、俺のことで手いっぱいこいつの問題を転校するまで全く知らなかったけど。

……聞いても、大丈夫だろうか。

「なあ、来未」

俺が、遠慮がちに話すと、来未はこちらを振り向いた。

「なあに？」

「えっと……。お前の家、どんな感じなんだ？」

俺はかなり遠回りな聞き方をしたが、来未は直ぐに意図を読んできた。

「……大丈夫だよ。透也の家よりわね」

そう言つて、少しはにかむように笑った。

「そっか。その……。今さらだけど、あの時はすまなかったな」

「あの時？ 別に透也は何も悪いことしてないじゃない」

「ああ、いや、そう言つ事じゃなくて……。そういえば、おばさんは元気か？」

俺がそう言つと、来未は少し思案するように目を閉じた。

…… 4年前、こいつの家族は旅行に行くことになっていたらしい。

こいつは、母親と仲があまり良くなかったみたいで、旅行に誘われたことを結構喜んでいたらしい。

実際、仲が悪い所など、俺には微塵もわからなかったのだが、母親もながいこと一緒にいたから、来末に少しずつ寄っていかうとしていたのかもしれない。

だけど、その時にあの事件は起きた。

来末の家族は交通事故にあったのだ。

高速の途中で、前のトラックが急に停止をしたらしい。

原因はエンジンのトラブルらしいのだが、俺も詳しくは聞いていない。

その時に、後ろを走っていた車を運転していたこいつの家族がそのまま衝突してしまったのだ。

そこで、こいつとおばさんは奇跡的に一命を取り留めたのだが、こいつの親父さんとお義姉さんが亡くなってしまった。

義姉、というのは、実はこいつは父親の連れ子で、義姉の愛美さんはその再婚相手の今のおばさんの連れ子だったからだ。

愛美さんは、才色兼備という言葉がまさにしっくりくるような、はたから見ると完璧な人だった。

もちろん、完璧なんてありえないと個人的には思うが……。

そのせいもあってか、おばさんはかなり溺愛していたようだ。

確かに、今から思えばおばさんの溺愛っぷりは少し以上だった気がしないでもない。

だけど来末と愛美さんはかなり仲のいい義姉妹だった。

もちろん、これは俺の主観なんだけどな。

年は3つ離れていたから、俺は愛美さんと遊んだことはほとんどなかったんだけど。

ちなみに、おばさんとあまり仲が良くなかったっていう話は、潤

から聞いて、来未に直接聞いたことがある。

……何で潤がそんなこと知ってるんだ？

「うん。お義母さんももう元気になったよ！ ……あたしもよく話すようになったし」

「……そっか。よかった……とは言えないけど、でも、打ち解けられたことはよかったな」

「うん。それに、謝る必要はないよ。透也だって……」

来未が何かを話し始めようとした時、四乃さんの家の玄関が急に開いた。

四乃さん……一人か。

「出掛けるみたいだな」

俺がそういうと、横で来未が頷いていた。

俺たちは、出来るだけ自然に後ろについて行った。

……

四乃さんは、本屋に入って行った。

そこでは俺たちは接触しないようにとりあえず出入り口の所で待っていた。

しばらくすると、一冊の小説を手に持った四乃さんが出てきた。そしてそれを持って別の場所の喫茶店に入って行った。

どうやら普通に読書するみたいだな。

「……っていうか、休みの日に喫茶店で読書って……見た目通りじゃねえか」

俺のつつこみを横で聞いていた来未は、砂糖を大量に入れたコーヒーを飲んでいた。

「本当に、こんな女子高生存在するんだねえ」

「まあ、お前は本なんて読まないもんな」

俺がそうからかうように言うと、来未は頬を膨らませて怒ったようなしぐさをしていった。

「失礼な。私だってちゃんと読書くらいするよ」

「ほお。じゃあ、一月に何冊ぐらい読むんだ。もちろん、学校の教材は抜きでな」

「……う、5冊くらい……っかなあ」

明らかに嘘っぽい口調を聞いて、俺は自分の中のSつけがマツクスになるのを感じていた。

「なるほどな。俺は1冊読むか読まないくらいだな。来未は凄いなあ。本当に、学校の教科書とか読むのも俺はしんどいつていうのに。……で、たとえばどんな本を読むんだ？」

「え、えつとお……あ、アラ。ンとかあ……」

……ぷつ。

「ば、バン。ヨーとカ。ーイの大冒険とかあ……」

……ぷぷつ。

「ゴ。モンとかかな」

ぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷつ。

俺は心の中で大爆笑していた。

いかんいかん。ここで笑って四乃さんにばれたら全てが台無しだ。

絶対に笑わないようにして対応しないと。

「そ……そつか。……ぷぷつ。ば、バン。ヨーとカ。ーイの大冒険を読んでるのはさすがだな。……ぷぷぷつ。ま、また今度貸してくれよ」

俺は顔をびくびくさせながら、何とかセリフを言いきった。

「う……うん……」

来未は俺の反応を見て、自分のミスに気づいたんだろうか、赤く
なつて下を向いてしまった。

いかん、いかん。また本業を忘れるところだった。

っていうか、時間がもう6時になっていた。

「おい、来未。確か7時から10時までバイトだったよな？　ここ
までで十分だぞ」

「う、うん。そのつもりだったけど、やっぱり気になるし……」

「いや、でももしかしたらこのまま帰るつもりかもしれないし、お
前はやっぱりバイトに行ってくれ。明日にまたちゃんと報告するか
ら」

俺がそう言うと、しびしび納得した感じで頷いてくれた。

「うん、わかった。……じゃあ、また明日」

「おう。……言っとくけど、ばれないように帰ってくれよ」

俺がそう言うと、抜き足、差し足、と言った感じで帰って行った。

まあ、今日が休日だから店内がかなり混んでるからあんなことし
なくても問題はないんだけどな。

ちなみに、来未はコンビニの店員な。

似合ってたな。

あの地味さ。

俺はそんなことを考えてその場にいた。

店が7時あたりから少し空いてきたので、俺はばれないように先に出ておいた。

少しすると、ラッキーなことにすぐに四乃さんも出てきた。

さて、ここからがラストだな。

俺は気合いを入れなおして尾行を続けた。

……………

四乃さんは繁華街のかなり人通りの多い道を選んで歩いていた。

俺は、歩く人にもみくちゃにされながらついて行っていた。

しかし、ここはこの時間になるとこんなに込むんだな。

俺は、自分の家から少し離れたここがこんなに都会っぽい状態になるとは知らなかったので、少し感心していた。

なるほどなあ…………。

だけど、俺はあまり好きにはなれないな。

そんなことを考えて、尾行を続けていたんだが…………人ごみを抜け

出した時に、四乃さんの姿が消えた。

「——しまった！」

どういうことだ。

ずっと一定の距離を保っていたのにいきなり消えるなんてことがあるとしたら……

「尾行がばれていたのか——」

俺は慌てて考えうる出来るだけ危なそうな道に向かって走って行った。

「……くっ、どこだ？」

どこを見ても同じような風景が続いているので、正直嫌気がさしていた。

田舎に住んでいたのに、いきなり上京してきた人の気分がわからない。

そんなふざけたことを考えて十字路を左に曲がった時

「——っ！——！」

四乃さんを見つけた。

——知らない男と二人で歩いている四乃さんを。

丁度、四乃さんは、男から現金のような封筒を受け取っているところだった。

「……マジかよ」

俺は驚きすぎて、唾が喉を通らなかった。
そうしているうちに、四乃さんたちはまた歩きだした。

ど、どうする？

俺は必死に思考を巡らせた。

さすがにこんな経験はない。

この際、このままつけて、現場で抑えてしまおうか。
……って、現場って何だ。

それは実際にそうなのかもわからないし。

「……谷内さん、今日は……に行く？」

「ああ、あまり……に行かな……とな」

俺が思考を巡らせているうちに、二人は話しながら少しずつ離れて行く。

——もう行くしかない。

↑ここからの分岐です。

そう考えて、俺は一步を踏み出そうとした。

その時、

「武藤君？」

俺の横から俺を呼ぶ声がした。

え？

俺はその人を確認した時、頭の中が真っ白になった。

「四乃さん……何で？」

「何でって、武藤君が何か困ったような顔をしていたから声をかけたんじゃない」

俺は四乃さんから視線を外し、さっき追ってたはずの四乃さんにもう一度目を向けた。

その四乃さんに一似た人……はホテル街とは反対の方向に丁度抜けてしまうところだった。

「どうかしたの？」

四乃さんは俺の視線の先を確認するようにして見ていた。

「……えつとさあ、四乃さんは今日何してた？」

「今日？ 今日朝から本屋に行って、その後喫茶店で読書していたくらいかしら。それで、今から家に帰るところ。それがどうかしたの？」

だよな。

じゃあ、さっきのは見間違いだったのか。
驚かせやがって。

「いや、特には……。それならいいよ。あ、送って行くとか？」

「いえ、いいわ。ちょっと今、とても急いでいるから」

「あ、そうなのか。じゃあ、また学校で」

「ええ、それじゃあ」

そういうと、少し焦ったように四乃さんは俺の前から走って立ち去って行った。

よかった……。んだが、何か違和感を感じるような。
何だろうな？

次の日、俺は二人を集めてまた屋上に集合していた。

「で、とりあえず昨日の報告からだけど……」

俺はこの前と同じように、報告から開始した。

二人は俺の話にしきりに頷いていた。

そして、俺が話し終わると今度は二人も少し安堵したようだった。

「じゃあ透也が言っただみたいに麗菜ちゃんは大丈夫そうじゃん」

そう言って、潤も満足そうな顔をしていた。

「そう……だよな」

俺が少し詰まり気味にそう答えると、来未は少し心配そうに俺の顔を覗き込んできた。

「どうかしたの？」

「いや、確かによかったんだけど、何か少し引つかかって……」

「どの辺が？」

「いや、俺もよくわかんないんだけど……」

俺がそう言うと、潤が少し場を明るくするように言った。

「まあ、どちらにしても来週の日曜までまだ時間があるんだ。今は昨日の結果を喜んで、透也は気になることを考えてくれたらいい。もし手助けが必要だったら俺も……俺たちも手伝うからさ」

潤のその言葉に続いて、来未も「うん！」と笑顔で言った。

「ああ、ありがとう」

そこで俺たちは解散して、また午後の授業のために教室へ戻って行った。

ふう。

いったい何なんだろうな。

俺は放課後になってもいまだに昨日のことについて考えていた。
帰宅しながら。

確かに、昨日は全く何とも問題なかった。

四乃さんは結局白だったと思うしな。

ただ、やはり最後の分かれ道に感じたあの違和感は何だったんだ
る。

四乃さんは昨日別れ際に何て言ってたっけ？

——今日は朝から本屋に行って、その後喫茶店で読書していたくら
いかしら。それで、今から家に帰るところ——

——いえ、いいわ。ちょっと今、とても急いでいるから——

ごく普通の会話だ。

だけど、何か……

俺が考え事をしていると、来未が俺の横をダッシュで通り過ぎて
行った。

「あ、おい、来未！」

俺が呼びかけると来未はこっちに軽く振り返り、少し焦ったよう

な口調で言った。

「あ、透也？ ごめん、今、かなり急いでるの。四乃さんの事だったら申し訳ないけど、また電話かメールでもして！」

そう言つと、有無を言わず立ち去つて行つた。

何だ、あいつ。

あんなに急いでるなんて珍しいな。

まあ、用事があるんなら別に……

そんな風に考えていると、急に俺の頭の中で糸が繋がった気がした。

そうか。

「はは、何だよ。そう言う事が……」

俺は自分の馬鹿さ加減にただただ、乾いた笑いを漏らすしかなかった。

「何でこんな単純なことに気付かなかつたんだ」

他のやつならとくに気づいていたかもしれないのに。

ちっ、とにかくそういうことなら行動するのは今夜だな。

現在午後8時。

俺は四乃さんのバイト先の業務員用の出入り口の前で待っていた。そして、15分ほどたった時、四乃さんは他の従業員よりも一足先に出てきた。

「四乃さん」

俺が声をかけると、四乃さんは驚いたように目を丸くした。

「武藤君？ どうしてたの？ 店はもう閉まったわよ」

「ああ、わかってるよ。今日は四乃さんと話をしに来たんだ」

「そうなの？ でも、私これから少し行くところがあるんだけど」

「大丈夫だよ。歩きながらでいいし、すぐに終わるから」

俺がそう言うと、四乃さんは頷いて歩き始めた。
俺ももちろん隣に並んで歩き始めた。

「で、何かしら？」

いつものように澄ましたように四乃さんはそう尋ねてきた。

「四乃さんって昨日俺と別れた後どこに行ってたの？」

「昨日のあの夜の後のこと？ 言っていた通り家に帰ったわよ」

「でも、何かとても急いでたみたいだね？」

「ええ、用事があったから」

「どんな用事？」

俺らしくない、そんなふざけた質問に少しいらだったようになつて答えた。

「……あなたにそこまで言う必要があるかしら？」

「ああ、確かにそうだね」

俺はニコニコしながらそんな風に言った。

正直、自分でもこんなやつ嫌だな、と思った。

「じゃあ、質問を変えるよ」

俺はそう言つと、あまり延ばしすぎても仕方ないので、確信に迫つて行くことにした。

「四乃さんって本当に昨日急いでたんだよね？」

「だからそう言ってるでしょ？」

「じゃあさあ……」

俺は立ち止まり、四乃さんの瞳をしっかりと見て言った。

「何で昨日俺に話しかけてきたの？」

つまりはそういうことだ。

今日俺が来未とすれ違った時に感じたのはただ単純にこのことだけ。

昨日とても急いでいて、かつ、俺と話し終わった後に走って俺の前から消えた四乃さん。

ただ、その一点だけが俺は腑に落ちなかったのだ。

俺のその言葉に四乃さんは初めて言葉が詰まった。

「え？ あ、いや、別に、急いでいたけど、武藤君と少し話すぐらいの時間はあったから」

確かにそうだ。

だけど……

「じゃあさあ、次で最後の質問ね」

俺は一呼吸置いてから言った。

「どうして家と反対方向に走って行ったの？」

俺がそう言うのと、四乃さんは少しうつむいて言った。

「武藤君……私の家の場所知ってたの？」

俺が頷くとまるで、そこが気がかりだった、という風に頭を振った。

「そうなの……。じゃあ仕方ないわね。そうよ、あなたが思っている通り、私が援助交際をしているのよ」

あっさりと、四乃さんはそう言った。

……たったこれだけの追及で。

……やっぱりな。

「家の場所とかを調べてここまで確認しに来てくれていたという事は、やっぱり家のだいたいの事情とかも知っているのよね」

俺は黙って頷いた。

「そう……。私の家はあなたが聞いた通り少し大変だね。両親とも中々家に帰ってこないし。だから、実際自分のことくらい自分でしなくちゃいけないのよ。それで、手っ取り早く稼ごうと思って選んだわけよ」

たったそれだけ。

説明はたったこれだけだった。

「どう？ これで私っていう人間がだいたいわかったかしら？」

少し投げやりな風にそう言って、四乃さんはまるで自嘲するかのようにつつた。

俺はそれを聞いて、確信して言った。

「ああ、四乃さんは俺の思っていた通りの人だ」

俺がそう言ったことに、四乃さんは何故か少し傷ついたように目を伏せた。

だが、すぐにまた俺の方を向きなおした。

「でしょ？ だから、もう……」

四乃さんが何かを言おうとしたのを遮るようにして俺は言った。

「四乃さんは俺の思っていた通り、とても優しい人だ」

「——っ!」

四乃さんは俺のセリフが予想外のものだったのか、その場で固まっていた。

「確かに、四乃さんがしていることはいいことかはわからない。俺が人に言える立場じゃないのは確かだけど、もっと他の人を頼ればいいんだ」

俺がそう言うと、四乃さんは、はっとして話し始めた。

「ま……待って！ 武藤君、何のことを言っているのかしら？」

「何って？」

「私のやっていたことはそんな簡単に許されるようなことではないじゃない？」

「四乃麗菜のやっていたことは許されないことなんかじゃないよ」

「——っ！」

「二人で止めよう。四乃綺菜を」

←
←
←

ここからは予想通り二人で妹を救って、本編で主人公が姉に言ったように、姉が妹に言う感じです。

個人的に主人公とヒロインと言う感じにしたかったので、こちらは省きましたが、こちらの展開も中々気にいっています。

？仲間と一息

月曜日、学校でいつもの面子を集めて昼休みに屋上に行った。

「えゝ、コホン！ では、昨日二人に連絡した通り、今日から四乃さんも混ぜて俺たち4人で昼飯を食うことになったから」

「ヒューヒュー」

「いえい、いえゝい」

潤、来末の順によくわからない反応を示していた。

「と、言う事で、来末も今日からは完璧に絶対一日も欠かさず俺たちと一緒に食ってくれ。何でかと言うと、四乃さんに俺たち男二人で話をふり続けれる自信がないから」

「いいぞ、いいぞゝ！」

潤が俺の言葉に、声援を送っていた。

俺は潤を、どうどう、と落ち着かせた後、四乃さんにふった。

「それじゃ、一応何か一言よろしく、四乃さん」

俺がそう言うのと、俺の少し後ろに立っていた四乃さんは頷いて、俺より一歩前に出てきた。

「あ、えっと……今日からお世話になります、四乃麗菜です。昨日は武藤君に本当にお世話になりました。これからもみなさん、よろ

しく願います」

「「こちらこそよろしく」」

四乃さんの堅い挨拶に潤たちが返事をした後、俺たちはそれぞれ弁当を出して昼飯を食べ始めた。

「あ、その前に……皆さんに報告しておくことがあります」

改まって四乃さんが言い始めたから、みんな食べるのを止めて四乃さんの方を向いた。

「えっと……お父さんの裁判の件なんですが、今朝、相手方が取り下げて下さったそうです」

「何という急展開!」

潤が俺たちの驚きの声を代弁して思いっきり叫んでいた。

そっか……俺たちからしたら、問題の解決にはなっていないけれど……
でも……

「よかったな、四乃さん」

「よかったね、麗菜ちゃん」

……むっ。来未のやつ、いきなり慣れ慣れしいな。

「うん、ありがとう、武藤君、み……来未ちゃん」

ふーん。

どうやら、お互いにここに来る前に決めていたみたいだな。
来未のどや顔がむかつくけれども……。
ってか……

「おい、来未。お前のそれは何だ？」

お弁当箱の中にあるまじきものが入っていたので、俺は驚いて聞
いていた。

「なにって……ドーナツだよ？」

まあ、このぐらいはふつうなのか……な？

こいつの感覚は俺には理解できんが。
ただ、四乃さんはこんなものを見るのは初めてだろう。
気分を害させないようにしないな。

そう思っただけの方を見ると……ドーナツを食べていた。

「えっ?!」

俺が不思議に思っていると、来未がまたどや顔をしていた。

「へへへ。さっき、ここに来る前に一つあげたの」

「おい。どうせ中にはちみつがたっぷり入ってるんだろ？」

俺がそう言っただけ、怒ったような顔をして言い返してきた。

「そんなわけないでしょ！ 失礼な。……はちみつ入りのドーナツなんて邪道だよ。はちみつは自家製じゃないと……」

そういつて、別のタッパーにたっぷり入ったはちみつを取り出した。

「はい！ 召し上がれ」

にこにこしているが、もちろん誰も手をつけない……

「め、召し上がれ」

いや、別に聞こえてないわけじゃないんだけどな。

……ってか、こいつのいじるところはちみつしかないよな。

とか考えていたら、四乃さんがおもむろにドーナツをちぎってつけどした。

「れ、麗菜ちゃん？」

潤が焦ったように言った。

四乃さんは、特に気にした風でもなくそのまま口にはこんだ。

「あら、おいしいじゃない」

四乃さんの普通の反応に俺と潤は驚き、来未は喜んでいた。

「でしょ！ ……っていうか、みんながいつも”つけすぎ”って言うから今日はタッパーに移してきたんじゃない」

「ああ……なるほど」

俺と潤は妙に納得していた。

来末のはちみつイコール「まつたりするっていう感じの公式が潜在意識に
刷り込まれていたんだな。」

今考えたら、普通にこいつのはちみつはつまかった。

「そっか。じゃあ俺らももらうか」

そうして、俺は高校に入って初めて普通に来末のはちみつを食べ
た。

俺らは平和を感じながら、主にはちみつドーナツをもぐもぐと食
べながら、普通に雑談をした。

そういえば、その雑談の中で、四乃さんがトリビア（？）的なこ
とを言っていたな。

「そういえば、ドーナツのこの穴についてどこかの誰かさんが興味
深いことを言っていたわね」

俺たちは食事を食べながら、彼女の方に顔を向けた。

「このドーナツ、穴があるでしょ？ だから、ドーナツの穴は存在
だという人がいたのよ」

「なるほどな」

俺は興味深い意見だなと思った。

「？ でも、穴は穴だから空白（？）じゃないの？」

その横で、来未が四乃さんに向かって言っていた。

「そう、そういう意見もあるのよ。まあ、どっちが正解かなんてわからないけど。この話で持たせるつもりもないし」

四乃さんは、この話は終わりだというようになり雑に話題を切った時、横から潤が入ってきた。

「俺は存在だと思うな」

もう一応話は終わったが、やはり気になっていたのか、四乃さんは潤に質問にした。

「なぜかしら？」

その反応を聞くとすぐに潤は、ニヤニヤしながら言った。

「だって、あんドーナツって穴ないじゃん」

そんな、何とも言えない答えを返してきた。

「ふっ……。なるほどな答えね」

四乃さんは馬鹿にするでもなく、そんな風に返していた。

俺はその光景を横で眺めがら、俺たちは結構いいグループになれるかもな……とか思っていた。

？、 5 緊張と感謝（前書き）

断章って感じですよ。

こついうのを一つ入れたかったので。

？、5 緊張と感謝

四乃さんも混ぜて食事をするようになってから数日がたっていた。俺たちは特に変化のない日々を過ごしていたのだが、突然放課後に来未から屋上に呼び出された。

俺は、何の話だろ？　とか思いながら、ゆっくりと屋上に向かった。

来未は先に屋上についていたようで、手すりに体を預けて、ぼうつとしていた。

夕陽の光を浴びて、心なしか頬が赤くなっている気がした。来未は少しだけ綺麗に見えた。

……つて、俺は何を考えているんだ。

俺は自分の虚言を振り払い、ゆっくりと近づいて行った。

「よ、よお。来未、来たぞ」

いかん、さつき変なことを考えたせいで少ししどろもどろになっている。

とにかく深呼吸深呼吸。

俺はゆっくりと呼吸を整えながら、来未の反応を待っていた。

「あ……透也……。早かったね」

少し火照った表情のまま、来未はそう呟いた。

何だ？

いつもと様子が違うぞ。

俺は来未の様子を見て、また心臓が早くなるのを感じていた。

「い、いや、そんなことないぞ。……で、どうしたんだ？」

俺は出来るだけ動揺を表に出さないようにしながら話した。

「うん……。あのね？」

ドキドキ

「あ、ああ」

「実は……」

「……」

俺は無言で来未の言葉の続きを待った。

そして俺の緊張が最高潮になった時……来未は言った。

「来週の土曜日、麗菜ちゃんの誕生日なの」

——はあ？

俺は今の言葉の意味を解釈するのに、数秒を要した。

らしいしゅーのどようびれなちゃんのたんじょうび。

来週の土曜日れなちゃんの誕生日。

ああ。

来週の土曜が四乃さんの誕生日なのか。
そうかそうか……

「……………」

「……………」

「えっと、それだけ？」

「うん、そうだけど？」

俺は心の中で失望と安堵の混ざった複雑な感覚を感じた。

まあ、こんなもんだよな。

俺がそんな風に思っていると、俺の後ろから声が聞こえてきた。

「おう、透也。……………ぷっ。……………来るのが早かったな」

——潤だった。

ってか、何でこいつ笑ってやがる。

……………もしかして

俺があることに思い当たった時、潤は来未に向かって親指を立てて言った。

「来未ちゃん、ナイス演技！」

俺はそのセリフを聞いて、おそろおそろ来末の方に向きなおした。

「えっと……ごめんね。透也？」

マジかよ。

こいつらに俺が一杯食わされるとか……

「わ、私はやめとこうって言ったんだよ？　で、でも二木君が絶対面白いからって……」

……やめてくれ、俺がみじめになる。

俺は来末の言い訳を聞きながら、一言も言葉を発さなかった。

……いや、発せなかった。

「でも、透也、いい思い出が出来ただろ？」

潤がニヤニヤしながら俺に向かってても親指を立ててきた。

俺はその親指を掴んで、逆に折り曲げながら笑顔で言った。

「どこがだっ」

潤はイタイタイと叫びながら、ひたすら謝っていた。

まあ、俺もちろん本気で折るわけではないので、今度は来末に向かつて言った。

「お前も……わかってるよな？」

来末もそれを聞いて、しどろもどろになりながら言葉を紡いで言

った。

「で、でも透也もこの前私を本のことだからかつたし、そ、それに……それに何より、こんなことで効果があるなんて思わなかったから……」

そう言いながら、来未はまた赤くなった。

確かに。

それを言われたら何とも……

だけど、こいつは前に比較的普通なやつだと言ったけど、実際は上の下ぐらいに可愛い方なんだ。

そんな奴にあんな仕草されたら、9割以上の男子は無理だろう。だが、そんなことを言うのももちろん癪なので、俺はいつもどおりに言った。

「ほう。そういうことならお前も覚悟しとけよ」

俺はそう捨てゼリフを吐いて、潤にボディীবローをかました。

「なん……で!?!」

潤は腹を抑えながら、そう呟いた。

無駄なやり取りを一通り終えた後、俺たちは本題に入っていた。

「で、だ。来週の土曜に四乃さんが誕生日なんだな？　それで、俺たちは何をするんだ？」

俺がそう尋ねると、来未はかねてから考えていたのか、すぐに予定を言い始めた。

「絶対にしようと思うのは誕生日パーティ。これは、出来たら四乃さんの家以外がいいんだけど……」

そう言っつて、俺と潤の顔を見る。

「俺の家はもちろん無理だぞ」

「俺んちは……梓がいるしなあ。それに、なにより狭い」

「私の家も……ちょっと、無理っばいかな？」

……全滅か。

「やっぱり、四乃さんの家でするってのが一番なんじゃないか？」

俺がそう言っつと、潤は頷いたんだが、来未は考え込んでいた。

「やっぱり……でも、ドツキリにしたいなあ」

まあ、その気持ちはわからないこともないが……

「でも、どうするつもり、来未ちゃん？　さすがに他の人に借りるわけにもいかないでしょ？」

潤の言葉に来未はさらに悩んでいた。

……待てよ、他の人に借りる？

俺はあることが思いついた。

「そっか、なるほどな。無いんなら借りればいいんだ！」

俺が一人で得心言ったように言うと、二人は驚いたように俺の方を向いた。

「え、透也借りるあてあるの？」

「友達とか知り合いからってことか？ そんなの、もちろんない！」

俺は清々しい顔でそう言った。

「じゃあ、どうするんだよ？」

俺の発言に、不信感マックスの潤が横から口を挟んできた。

「いや、別に知り合いから借りる必要なんかないよ。部屋を一日だけレンタルしてくれる店なんていくらでもあるんだから」

「そうなの？　じゃあ、すぐにそこ借りに行こうよ！」

俺の言葉に、さっきまで悩んでいたのが嘘のように来未は元気になって走り出した。

「お、おう、そんな急がなくても大丈夫だよ。……おい、潤も行く

ぞ」

「あいよ」

潤はそう答えて俺の後ろをゆっくりと歩いて着いて来た。

来未はもう先に屋上からでて、階段の下に向かったようだ。

「……あのさあ」

潤は立ち止まり、いつもと違い、少し真剣な表情で俺の方を向きながら言った。

俺はその声を聞き、振り返った。

「どした？」

「お前、もしさっき来未ちゃんがマジでお前に告ってたら……どうしたの？」

「は、はあ？ お前、何言ってるんだよ？」

「だから、例えばの話だよ」

俺は適当に言おうかとも思ったが、なぜかここはちゃんと書いておいた方がいい気がして、まじめに答えていた。

「……わかんねえ」

「……そっか」

俺の返事に満足したのかよくわからないが、俺は踵を返して屋上

のドアを開けた。

「……お前が振ってたって言わないってことは、そういうことかな」

俺の後ろで潤が何かを呟いていたが、俺には聞こえなかった。

金曜日。

俺たちはすでにこの前の放課後に部屋を借りていたので、放課後にその部屋の飾りつけに向かっていた。

「そう言えば来未、お前ちゃんと四乃さんを誘ったのか？」

「もっしろんだよ！ 私を誰だと思ってるの？」

いや、お前だから不安だったんだよ……とは言わず、俺はよくやったと来未の頭を撫でてやった。

来未は猫みたいになって喜んでいた。

「それで、来未ちゃん？ 飾り付けの道具なんだけど、これで足りるの？」

潤はさっき商店街で購入した袋を見て少し不安そうに尋ねていた。

「大丈夫だよ！ 実は昨日の内に少し飾り付けさせてもらってたんだ。今週は借りる人がいないらしくて」

へえ。

まだ日にちはあるのに貸してくれるなんて、優しい人だったんだな。

それに、来未が率先していくとはな。

俺が一人で感慨深く思っていると、潤も同じ気持ちだったか、似たようなことを口走っていた。

「そうなんだ。……来未ちゃんって意外としっかりしてるんだね」

潤が感心したように言うと、来未は頬を膨らませていた。

「意外」って何よ！ 二木君も透也みたいなこと言って」

「あ、ごめんごめん。来未ちゃんはいつもしっかりしてるよ」

潤は来未へのフォローで必死になっていた。

まあ、フォローするだけでも偉いけどな。

俺はそんなことを考えて、歩き続けた。

部屋について、改めて俺たちは広さを確認していた。
広さは15帖の間だ。

俺たちの感覚ではかなり広い。

「よし、じゃあ早速始めるか」

俺の掛け声とともに二人とも動き始めた。

来未は意外とこういう事になれているのか、テキパキと壁に装飾をしていた。

俺と潤はもちろんこんなこと初めてなので、来未に聞きながら進めて行った。

「そういえば来未、料理はどうするんだ？」

「もちろん作るよ。透也はこの前のお弁当を見た限りは結構作れそうだね。二木君は何か出来る？」

「無理！……！」

来未の質問に潤はさわやかに答えていた。

「……そつかあ。じゃあ、私と透也で料理作るから、二木君はケーキを買ってきてくれる？」

「あ、ケーキか……。ケーキなら作れるかも」

おいおい。

キャラが違うぞ。

とかツツコもうと俺が考えていると、潤がオチを言った。

「梓が」

なるほどな。

確かにそれなら問題なさそうだな。
だけど、迷惑掛けるのもな。

俺がそんな風に考えていると、来末も同じようなことを考えていたのか、少し申し訳なさそうに話し始めた。

「そっかあ。でも、梓ちゃんに迷惑を掛けるのもなあ……」

「いや、それは大丈夫なんだけどね。その……出来れば梓もこの誕生日パーティに混ぜてあげたいんだけど」

潤は、来末以上に申し訳なさそうにそう言った。

「いや、そんなのは全然大丈夫だと思うよ！　ねえ、透也？」

急に話を振られて一瞬驚いたが、俺は同意を表した。

「あ、ああ。梓ちゃんが問題ないなら、四乃さんには潤の妹だって説明したら絶対納得してもらえと思う」

「そ、そっか。サンキュー、二人とも！　ケーキは俺らに任してくれ！」

潤はそう言って、今日一番の笑顔を見せた。

こいつは、ホントにシスコンだな。

……まあ、家族を大切にすることは一番大事なことだけだな。

俺はそんなことを考えた後、二人に向かって言った。

「よし、じゃあラストスパート掛けるか」

俺の言葉に二人とも頷いて、作業を再開した。

土曜日の朝、俺と潤と梓ちゃんは先にケーキやらクラッカーやらと色々準備して部屋で待機していた。

「あの、本当に私も参加していいんですか？」

椅子に腰かけていると、朝から何度目になるのか、同じことをまた尋ねてきた。

「だからいいって言うてるだろ？ 梓は気にしすぎなんだって」

俺が返事をする前に潤がそう言ってまた梓ちゃんを宥めていた。

——やっぱり先輩ばかりのこんなところに梓ちゃんを混ぜるのはよくなかったんじゃないか。

俺がそう言ってさっき潤に尋ねたけれど、潤は、

——いや、梓は確実に喜んでるね。

そう言って、一步も譲らなかった。

まあ、兄貴のこいつが言ってるんなら問題はないだろうが。

「う、うん。とにかく今日は四乃先輩の誕生日なんだからしっかりお祝いしないとね」

そう言つて梓ちゃんがモチベーションを上げたところで、丁度俺の携帯が鳴った。

来未からのメールだ。

——ターゲットが接近中

それだけだった。

……つか、ターゲットで。

そんなふうにつっこみたかったが、時間が無いので俺たちは直ぐに待機場所、というか玄関に移動した。

そして待つこと1分。

ドアの前で声が聞こえてきた。

「く、来未ちゃん。本当にここでいいの？」

「いいのいいの。今日はここで遊ぶことになってるんだから」

そんなふう言つて、ドアに手が掛けられて、ゆっくりとドアは開かれた。

「四乃さん、誕生日おめでとう」

「麗菜ちゃん、お誕生日おめでとう」

「四乃先輩、お誕生日おめでとございます」

俺たちは3人同時にそう言って、勢いよくクラッカーを鳴らした。四乃さんは入った瞬間何のことかわからずぼーっとしていたようだ。

そして、ようやく気がついて話し始めた。

「こ、これは？」

「えへへ、麗菜ちゃん今日誕生日でしょ？　それで、みんなで準備したの」

四乃さんの顔を見て、来未はしてやったりという顔をしながらそう言った。

四乃さんは来未の話聞いた後、もう一度部屋に飾りつけられたものを一つ一つ確認するようにゆっくりと見回した。

そして、今度は俺たち一人一人の顔を確認するように見た。

「こ、こんな。わざわざ私のために？」

俺たちは何も言わず、ただ、四乃さんの顔を見ながら頷いた。

「ありがとう。こんなことしてもらったのは生まれてはじめてよ。

……その……っ……」

四乃さんは話している途中で涙をこらえるようなしぐさをしていった。

「お、四乃さんまた泣くのか？」

俺が茶化すようにそう言つと、顔をキツとあげて俺を睨みつけた。

「な、泣かないわよっ！」

「へえ」

俺はニヤニヤしながら四乃さんの反応を楽しんでいた。
横でみんなは笑つてたけど。

「さ、それじゃ早速始めよっか」

潤がそう言つて、奥のテーブルに並べている料理の前に四乃さんを連れて行つた。

「わあ、凄い。これ全部手作り？」

「うん。これは透也と私で作つたんだよ」

「そ、そうなの？」

そう言つと、意外そうな顔をしながら四乃さんは俺の方を見ていた。

「なんだよ？」

俺がぶっきらぼうにそう言つと、四乃さんは「い、いえ……」と言いながら視線をそらした。

まあ、俺が料理できるように見えないのは認めるけどな。

俺はそんなふう pensando、これ以上ツツコムのはやめておいた。
そんな俺たちのかけあいが終わったのを確認した潤は、四乃さん
に向かって梓ちゃんと一緒に一歩近づいた。

「あの、麗菜ちゃん。来未ちゃんからもう聞いてると思うんだけど、
こいつが俺の妹の梓」

梓ちゃんは紹介を受けるとすぐにぺこりと頭を下げた。

「やっぱりこの子が……。可愛い子がいるなと思ってたのよ」

そう言ってニツコリと梓ちゃんに向かって笑った。

「あ、あの、二木梓です。勝手に参加させてもらい、すみません」

そう言ってもう一度頭を下げた。
だけど、それを見た四乃さんは、

「いえ、いいのよ、そんなの。私は今日までパーティのことすら知
らなかったんだから」

そんな軽いジョークを言って、梓ちゃんを和ませてくれた。

やっぱり四乃さんは思った通りの人だな。

俺はそんなことを考えていたが、そろそろ始めないと料理が完全
に冷めてしまうなと思いなおし、来未に小さな声で話しかけた。

「……じゃあ来未、今日はお前が幹事なんだから、しっかりと仕切
ってくれよ」

「え、わ、私が！？……よ、よし。じゃあいきます」

そう言うと、みんなに向かって急に飲み物を入れたコップを配りだし、そして小さな椅子の上に立った。

「えー、コホンコホン。それでは、今日は麗菜ちゃんの誕生日を記念して、わたくし三島来未が音頭を取らせていただきます」

「いいい、いいぞ、来未ちゃん！」

「三島先輩、頑張ってください」

二木兄妹が応援すると、まんざらでもないような顔をして来未はみんなをゆつくりと見回した。

「それでは、みなさんコップを上げてください。……それでは、これから私たちがずっとずっと友達でいれますように。……乾杯……！」

「『乾杯！』」

全員でそう言った後は、もうみんなで好きなように料理を食べ始めた。

予想通りのことだったんだけど、梓ちゃんと四乃さんはとても仲良くなっていた。

……むしろ、梓ちゃんが四乃さんの妹のようだった。
まあ、そんなこと言ったら潤が暴れそうだけどな。

「ご飯を食べ終えると、潤と梓ちゃんは奥に置いてあったケーキを持ってきて、開けた。

出てきたケーキは普通のケーキ屋で売っていそうであり、またどこかホームメイドの暖かさもあるケーキだった。

「へえ、こりゃすごいな」

俺がそうほめると、梓ちゃんは照れたように少し俯いて言った。

「お、お兄ちゃんにも手伝ってもらいましたから……」

「マジで。潤ってマジでケーキ作れるのか？」

「……まあ、梓の方がうまいけどな」

潤にしては珍しく少し照れたようにそう言って、そのまま誤魔化すように続けた。

「そんなことよりほら、麗菜ちゃんこっちこっち」

四乃さんをケーキの前に手招くと、梓ちゃんに頼んで電気を消してろうそくを立てた。

「よし、それじゃあ……」

俺がそう掛け声を出すと、みんなで同時にお決まりの歌を歌いだした。

そして、最後のハッピーバースデーを言い終わったところで、四乃さんは大きく息を吸ってろうそくを消した。

もちろん、一度では消しきれなかったけれども。

四乃さんはとても照れたような顔をして、でもやっぱり喜んでくれたみたいだ。

今日は本当にやってよかったな。

俺はケーキを食べながらそんなことを考えていた。

パーティを終えた後、俺が最後は片付けておくとやったんだが、四乃さんがどうしても譲らずに結局俺たち二人で片付けることになった。

ちなみに、梓ちゃんはまだ遅いから潤と一緒に帰り、来未は今からバイトだ。

俺は、食べ終わった食器を四乃さんと一緒に洗っていた。

「今日は、本当にありがとう」

「いや、礼なら俺じゃなくて来未に言ってくれ。あいつが今回は80%ぐらい企画してくれたんだからな」

「来未ちゃんにはもう何度も言ったから。だから、今はあなたに言うっておきたいの……」

そう言つと、手を止め、俺の方を向いてニツコリと笑った。

俺は不覚にもそれにドキつとしてしまい、慌てて周りを確認した。俺の奇妙な行動を見ていた四乃さんは、少し不思議な顔をして言った。

「どうかしたの？」

「いや、この前も潤が仕組んでたから、今回もその類かと……」

俺の発言の意図が全くつかめなかったようで、四乃さんは首を傾げていた。

「まあ、とにかくありがとう」

そう言って、再び皿を洗い始めた。

「……ああ」

俺は照れを隠してそう返事した後、同じように皿を洗い始めた。その後は二人で全部片付けたあと、部屋の鍵を貸してくれた人に渡しに行き、俺は四乃さんを家まで送って行った。

四乃さんはまたお礼を言っていたな。

……これからも、こんなふうにみんなで過ごせていけたらいいな。俺はいつの間にかそんなふうに考えている自分に気がついた。

？噂と決意

四乃さんをグループに入れてからしばらくは特に大きな問題もなく、まさに日常が続いていた。

俺は、緋香里からメールが来た日は自主的に早起きをして、ランニングをしたりして過ごしていた。

そして、いつもの公園を数周回ってだいたいの疲れを感じてきたとき、俺は隣を走っていた緋香里に声をかけた。

「ふう〜。じゃあ、今日はこれぐらいにしておくか？」

俺の言葉に、緋香里はタオルで汗をぬぐいながら返事した。

「そうですね。今日もありがとうございました」

いつものように頭を下げる。

「いや、だから別に感謝されるようなことはしてないって。俺も走るのが、実際、趣味みたいなもんなんだから」

「でも、私からお誘いしたわけですし……」

俺が何回そう説明しても、こいつはお礼を必ず言ってくる。

そういう性格なんだなと理解してきたが、感謝される意味がわからないのでこういうやりとりを毎回繰り返している。

「まあ、もういいよ。わかった。とりあえず学校があるんだし、行くか」

俺がそういうと、頷いて、お互いに学校に向かって歩きだした。初めのうちは、緋香里は家に帰って準備をしてから行っていたから気付かなかったんだが、どうやら俺の通っている学校のすぐ近くの中学に通っているらしい。

ようするに、梓ちゃんと同じ学校だな。

今では、この娘も学校でシャワーを浴びるようになったので、一緒にランニングする日は一緒に行くようになった。

……俺が自分の通っている学校の場所を教えた次の日から、なぜかこんな状況になったんだよな。

俺は今の奇妙な状況を出来るだけ見られないように、学校にはもちろん早めに行っていた。

潤に見られたら、何言われるかわからないからな。

そんなことを考えて俺は学校に向かっていた。だが、そんなことを考えている時に限ってそういうことは起こるわけで……。

ヤバイ……

潤の家の前から潤と梓ちゃんが丁度出てくるところだった。

とっさにどうしようか考えたが、緋香里にこのことをあまり説明していなかったことに今気がついた。

こうなったら……仕方ないな。

俺はあきらめて自分から話しかけることにした。

「おい、潤」

俺の声に反応して、潤と梓ちゃんが同時にこちらを向いた。

「おう、透也じゃねえか！ お前、こんな時間……に……」

俺に向かって何か言っている途中で、俺の近くに女の子がいる事に気づいたようだ。

「お、おい透也。ちょっとこっちに来てくれ」

まあこうなるわな。

俺は、呼び出された通りについて行く。

「ちょっとこいつ借りますね？」

潤は緋香里に向かって、愛想笑いを浮かべながらそう言った。そして、話を聞きとられない程度に離れた後、潤は話し始めた。

「おい、あの子誰だ？ もしかして……彼女か？」

質問をする表情は、何だか妙に真剣な顔だった。

「いや、違うよ。まあ、簡単に説明するとだな……」

俺はとにかく誤解のないように、かつ出来るだけ簡潔に説明した。

梓ちゃんは妙にそわそわしてこちらを見ながら、緋香里の近くに立っていたな。

「……っと言う事だ。だから、まあ、お前の考えているようなことはない」

「なるほどな。とりあえずは納得した。……梓には、俺から説明しておくよ」

そう言つと、潤は梓ちゃんたちのもとに走つて戻つて行つた。

何を急いでるんだか。

俺はそんなことを考えて、潤の後ろをゆつくりと歩いて行つた。

「はじめまして。俺、二木潤って言います。それで、こいつが妹の梓です」

潤がそう言つと、梓ちゃんは横で頭をぺこりと下げた。

「は、はじめまして……。私は、飛……。緋香里って言います。えつと、呼ぶときはどうぞ名前で呼んでください」

そう言つて、緋香里の方も頭を下げた。

「了解、じゃあ緋香里ちゃん。とりあえず、歩きながら話そつか」

そう言つと緋香里は頷き、俺たちは4人で登校することになった。

とりあえず雑談というか……潤がひたすらに質問攻めにしていた。

「で、緋香里ちゃんはどこに住んでるの？」

「えっと、ここから一番近い公園の近くです」

「緋香里ちゃんは何歳？」

「先輩たちの一つ下になります」

「あ、じゃあ梓と一緒に……だつてさ、梓」

そう言つて、梓ちゃんに潤は話を振つた。

「え、あ……よろしくお願いします」

急に話を振られて対応しきれなかったのか、緋香里に向かって挨拶をしていた。

その横で、潤は一人で「なるほどなるほど」とか呟いていた。

そのまま潤がいくつかくくだらない質問を続けていると、いつの間にか学校にたどり着いていた。

「それじゃあ、俺たちはここで」

俺がそう言つと、潤は「じゃね〜」と言いながら、梓ちゃんたちに向かって手をふつた。

「はい、それでは」

梓ちゃんと緋香里もそれにならったあと、一緒に歩き出した。

「何だ、潤、あんな質問攻めにして。緋香里に興味あるのか？」

俺がそう言うと、潤は少し驚いた顔をして、その後、またニヤニヤとした。

「いや、まあ興味っちゃ興味なんかな。まあ、気にすんな」

そう言うと、俺の肩をバンバンっと叩いた。

「まあ、別に俺は気にしないけどな……って言うか、今日は何でお前ら早いんだよ」

俺は話題を変えるように、潤にそう言った。

潤には少し愚痴っぽく聞こえたかもしれない。

「それは……今は内緒だな。……まあ、いずれわかるさ」

潤はそう言うと、少し悲しそうな眼を一瞬したが、すぐにいつもの顔に戻って歩き出した。

俺は、何か嫌な予感というか、感じがしたけど、何も言わなかった。

「あ、そくだ！」

俺が黙っていると、潤は突然何かを思い出したように手を叩いて俺の方を向いた。

「何だよ？」

「……さっきお前と俺んちの前で話した時あるだろ？」

「あ、ああ……」

潤は妙な雰囲気を出して話しだした。

「実はな……お前……」

俺は唾を飲み込んだ。

そして数秒後、潤は言った。

「汗、臭かったぞ」

ぶちっ

頭で何かが切れる音が聞こえた。

俺はとりあえず潤にボディーブローをかました後、俺の荷物を潤に”お願い”して教室に持って行ってもらった。

……俺はもちろんシャワールームへ。

教室に戻ると、もうすでに結構な人数が来ていた。

俺は、とりあえず来未と四乃さんに朝の挨拶をすると、自分の机に突っ伏した。

まあ、走った後だからな……。

そういえば、潤がいないな……。

とか思っていたら、いつの間にか俺は眠ってしまった。

……………

はっ、と思い次に目を覚めたのは一時間目が終わったころだった。

何人かはすでに、2時間目の体育の準備のために、更衣室に向かっていた。

「お、やっと気づいたか」

俺が眼を覚ました事に気付いた潤が、俺の方に近づいて来た。

「何で起こしてくれなかったんだ……」

「起こしたよ。教師も、な。でも、お前が寝てるのが珍しかったか

ら、そのままにしておくことにしたらしい」

いや、駄目だろ教師。

俺は心の中で突っ込んだが、今さら言っても仕方ないので、更衣室に向かった。

潤はすでに体操着に着替えてあったので、直接グラウンドに向かったみたいだ。

更衣室に着いて、俺が着替え始めたころには、もう男子が数人しか残っていなかった。

さて、俺もさっさと着替えて行くか。

そう考えて着替えていたら、その残っていた連中から、妙な会話が聞こえてきた。

「……おい……聞いた……。……のやつ……らしいぜ」

「俺……聞いた……でも……なんて……デマ……？」

俺はそれを聞きながら、朝に感じたのと同じ、嫌な感じに襲われていた。

もしかして……。

俺はそんな風に思い、そいつらに近づいて行った。

「今の話、詳しく教えてくれないか？」

気がつくと、6時限目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴っていた。

どうやら、俺は1日中さつき体育の時間の前に聞いた話を考えていたようだ。

周りの生徒たちも、ちらほらと帰り始めていた。

「おい、透也。帰ろうぜ」

「あ、ああ」

俺は返事をして、潤について行った。

潤が俺を帰りに誘ってくるのは、梓ちゃん関連で何かあった時ぐらいだ。

「透也、今日は梓も一緒に帰ってもいいか？」

「いいよ、もちろん」

俺がそつ返事をする、梓ちゃんの携帯に潤は電話をして、学校の手前で合流することにした。

俺たちが先に校門前でしばらく待っていると、梓ちゃんが走ってきた。

「す、すみません！ お待たせして……」

梓ちゃんは肩で息をしながら、俺たちに向かってそう言った。

「いや、ぜんぜんいいよ。俺は別に急ぎの用事はないから」

俺がそういうと、梓ちゃんは息をゆっくり整え、にこりと笑った。

「おう、梓！ 今日は透也先輩も一緒だから、楽しく帰れるな！」

潤がそう言っていると、梓ちゃんはいつものように潤に怒り言い合いが始まった。

……まあ、怒ってるのは一方的に梓ちゃんの方だけだ。

一通り言い合いが終わると、俺たちはゆっくりと歩き出した。雑談をしている途中でふいに潤が俺に話掛けてきた。

「そう言えば透也、お前、今日は一日ぼーっとしてたな。何かあったのか？」

俺はドキリとしたが、出来るだけ平静を装って返事をした。

「そ、そうか？ 俺はいつも通りだったと思うけどな」

俺がそう返事すると、潤は「そっか……」と言って、それっきりその話題をふってはこなかった。

俺的にはよかったんだが、やっぱりこいつは誤魔化しきれないな……。

そんなふう思ったが、俺からもその話題に触れなかった。

代わりに普通に学校の話を梓ちゃんから聞いたりしているうちに、いつのまにか潤のアパートに着いていた。

「よし、じゃあ俺はこれで……」

そう言っ、俺が手を振って別れようとした時、潤に急に呼びとめられた。

「あ、ちよつと待ってくれ。まだ時間あるか？」

俺がそれに頷くと、梓ちゃんに今度は向きなおして言った。

「梓。これから兄ちゃん達で梓には言えないはずかし……話をするから、先に帰っておいてくれ」

梓ちゃんはそれを聞くと、びくつとして、顔を赤くしたかと思うと、部屋に向かって走って行ってしまった。

俺はそれを見た後、小さくため息を吐いて、潤に向きなおした。

「で、何だ？」

「一半 なかば、だいたい話の予想はついていたが、俺はそう切り出した。」

「……透也、お前、噂聞いたろ？」

「……ああ」

潤は、怒っているというよりも、素直な疑問のような感じで質問してきたので、俺は隠さずに答えた。

「そっか……」

潤がそれっきり黙ってしまったので、とにかく俺は頭の中で必要な情報を集めていた。

「潤が……今日学校に早く行ったのは、梓ちゃんを確認するためか？」

「ああ。あっちでは特に何もなかった」

俺は朝の時間に潤が教室にいなかったことを思い出していた。

あのときは、向こうの中学を確認しに行っていたのか……。

「それで、どうするんだ？」

俺は、出来るだけ慎重に言葉を選んで言ったんだが、潤は軽い返事で返してきた。

「別に、どうしようもねえよ。いずれこうなることはわかってたし、俺が実際にやったことなんだから、もしそれで避けられようが俺は気にしねえよ」

そう言って、潤は二カツと笑った。

「いや、お前がやったわけじゃ……って、そういう問題じゃないな」

俺は頭を振って、切り替えた。

「今はそんなことより、実際にお前たちの昔のことがみんなにばれたときにどう対処するかだな」

「ああ、このままなら広まるのも時間の問題だろ。……俺は、俺のここは別に問題ないんだけどな、中学の時もこういう事はあったから。だけど、梓はただの……被害者なんだ……。だから、もしこれ以上梓の心に傷が増えそうなら、俺は……」

潤は拳を握りしめて言った。

「許さねえけどな」

その言葉から俺は、潤の強い意志が感じ取れた。

こいつは妹を、たった一人の兄妹を守るのに必死なんだ。

俺には……俺には何ができるのだろうか。

潤の言葉を聞いて、俺は自分の無力さに対して怒りのような感情を感じていた。

だけど、やっぱり俺にはどうすることもできなくて、最後に絞り出せたのは少しの言葉だけだった。

「……お前ら兄弟は……悪くない。もし何かあったら……俺に……」

俺はいつの間にか、自然にそんな風に言っていた。

潤は俺の言葉に少し驚いたような動作をしていた。

まあ、俺も驚いてるからな。

潤は俺の言葉の意図を理解し、俺の肩を2回叩いた。

「サンキューな。……じゃあ、また明日」

そう言っつて、俺の帰りを見送った。

「透也……変わったな」

潤が後ろで小さく何かを囁いていた気がするが、俺は考え事をしていたので聞いていなかった。

入学式の日、俺は梓ちゃんに言われた。

——透也さんだけは、何があっても兄の友人であってあげて下さいね。

だから、俺は、例えあいつらが過去に
犯罪

を起こしていたとしても……

？兄弟愛と真実（前書き）

この回は若干グロがあります。

15歳未満、またはグロイ話が苦手な方は退出してください。

？兄弟愛と真実

あれから数日たったある日、俺の……俺たちの最も恐れていたことが起こった。

俺はその日はランニングもせず普通の時間帯に学校に行っている時で、途中でたまたま潤と合流して来ていた。

俺たちが雑談をしながら校内に入って行くと、掲示板の周りに人だかりができていた。

掲示板は下足のすぐ近くにあり、人が多すぎて教室まで進めないような状況だった。

「お、何か面白いことでもやってんのかぁ？」

潤がいつもの調子でそう言うと、掲示板の前に立っていた女の子がびくつと震え、おそろおそろという感じで俺たちに道を譲ってくれた。

俺は嫌な予感がし、潤よりも先に前に行ってその掲示板を確かめた。

「お、おい透也！ どうしたんだよ？」

そう言いながら潤も俺の立っている掲示板の近くに来た。

そこには、大きなチラシにめいいっぱい使って文字が書かれていた。

——二木潤は人殺し

潤はそれを見ると、怒るというよりむしろ焦ったような顔をして、すぐに表へ飛び出して行ってしまった。

俺は「潤！」と叫んだが、潤は振り返ることはなかった。

あいつがなんで飛び出して行ったかはわかってる。

だけど、それを見ていた人たちは周りで「やっぱり……」とか口々に言っていた。

俺は、これまで実際に起こった時の対処の仕方とかをずっと考えていた。

だけど、そんなことは結局意味なかった。

俺は怒りのままにただ叫んでいたから。

「誰だ!？」

いつもは全く大きな声を出さない俺が叫んだので、周りのやつは全員驚いていた。

「だから誰だつて……言ってるんだよ！」

俺は掲示板のボードを思い切り蹴飛ばした。

そうすることが、逆にここに書かれてあることは真実だと肯定しているようにしか見えないのだけでも。

だが、効果はあった。

どこからくすくすと笑い声が聞こえてきたからだ。

俺がその笑い声の主を見ると、いつも潤のことを「調子に乗っている」とかいちゃもんをつけて、目の敵にしていたグループのやつらだった。

「…………お前らか？」

俺がそう言つと、一番前に立っていた男がこっちに近づいてきた。

「だったらなんだよ？ 別に俺らが噂言いふらしたわけじゃねえし」

そんなふざけたことを言つてへらへら笑っていたので、俺は自分を制御する事が出来なかった。

気がつくとも男の顔を思いっきり殴りとばしていた。

近くにいた女子どもが悲鳴を上げていたが、俺を止めるだけの抑止力にはならなかった。

「て、てめえーっ！」

グループの他のやつらも、明らかに頭に血が上つて俺の方を向いていた。

そいつら全員に軽く視線を合わせた後、俺は一步前に足を踏み出して言った。

「…………お前らは」

「はっ？」

「……お前らは、何であいつがこれを見た後にすぐ、ココを飛び出して行ったか、わかってんのか？」

俺は自分の怒りを抑えるように、一つずつ言葉にしていっていった。

「ビビったからじゃねえの？」

俺の言葉を聞いたやつが、笑いながらそう返事をしてきた。

……こんなやつが、仮にも進学校であるこの学校で、しかも俺らと同じ年齢なのか。

俺は心の底から殴りたい衝動が再び湧いてくるのを必死に抑えた。

「だから……お前らはクズなんだよ」

「……てめえ、黙って聞いてたら調子乗りやがって。お前も同類のくせに」

男はそう言うと、単調にこっちに突っ込んできた。

俺は男の言葉に一瞬血が上ったが、すぐに抑え、襲いかかってきたその腕をとりそのまま後ろに投げて掲示板に叩きつけた。

「あいつは、そんなちっせえやつじゃねえよ！」

俺は残りのやつらと、野次馬の連中を一通り見まわしてから言った。

「……あいつは……逃げたんじゃない。……妹の……妹の無事を確かめに行っただ。……自分で今俺がやったようなことをやりたい

衝動を抑えて……それで、妹の心配をするようなやつだぞ。……なあ……お前らにこんなこと、できるのかよ？」

俺がそう言うと、周りの連中は誰一人声を発さなかった。少しすると、数人の教員が集まってきていた。

俺は、その中で担任と目があつたが、担任は俺を、俺たちを止めようとはしなかった。

むしろ、他の学年から除いてくる子たちをどかせてくれていた。

俺は心の中で感謝しつつ、またみんなの方に向きなおした。すると、今度は周りにいた生徒の方から声が聞こえてきた。

「……だけど、本当のこと……なんだよね？」

俺が声を出した子の方を振り向くと、その子は少し怯えたような顔をして、俺の返事を待っていた。

「それは……」

俺は言うべきか迷った。

潤がそれを望んでいるかわからないからだ。

あいつはいつでも梓ちゃんを優先して行動してきた。

これを言う事で……もちろん言わなくてもだが、あいつとこの周りのやつらとの間に壁が出来るだろう。

俺が自分の下唇を噛みしめて、少し思案していると、雑踏の中でじっと俺を見ていた一人の子が声を出した。

「言うべきだよ」

そう言って、俺の前に——来未——が出てきた。

「来未……」

「言うべきだと思うよ。二木君も、別に隠そうとしていたわけじゃないし。もちろん、これを聞いた後に判断するのはみんなだけど、少なくとも私たちはこのことを知っていても友達になれたんだから」

そう言って、俺の方に微笑んだ。

すると、さっきの子——来未のいつものメンバーの女の子——が、来未におずおずといった感じで尋ねた。

「来未ちゃんは……知ってたの？」

その質問に対し、来未は躊躇いとかいったものは皆無な調子で返答した。

「うん。知ってたよ」

いつもこの子らのグループの中ではひたすらニコニコ笑っていた来未がこんなことを言ったのだから、周りの子は非常に驚いていただろう。

「私は、例えば、知らぬが仏とか、知らない方がいいっていうことわざや言葉もいっぱいあるけど、それでも知らないこと怖いことだっと思うの。……もちろん、表面的な付き合いだけなら知らなくても何となく生きていけると思うけど。でももう、みんなはここまで

知ってしまったんだから、あとは私たちの話を聞いて自分たちで判断していくしかないと思うの」

来末が丁度そう言い切ったところで、潤が帰ってきた。

梓ちゃんを連れて。

いや、正確には来末が前に出たところから聞いていたようだ。だって、状況の整理が出来ていたみたいだから。

「潤、後はお前が決めてくれ。普通、例え漫画でもアニメでもこういう過去の話はご法度だと思う。だけど俺たちは、俺たちと同じように同情とかではなく理解してくれる人が現れると信じてる」

俺がそう言うと言き、俺たちの前に来てみんなに説明を始めた。

俺はそれを聞きながら、昔潤に聞いた話を思い出していた。

潤の家族は、潤がまだ小学生の低学年の時に離婚した。

そして潤が小学6年生になったある日、突然母親が再婚をすると言い出した。

もちろん、まだ小学生の二人にはどれだけの苦悩があったのかは、俺には計り知れない。

再婚は籍を入れるだけで済ませ、潤たちと新しい父親との生活が始まった。

潤は初めてその父親に会ったときから嫌悪感を抱いていたそうだが、自分の母親を選んだ人だから、と特に文句も言わずそれなりの生活を過ごしていた。

ただ、父親は結婚して数か月たったあたりから、母親への暴力を少しずつするようになってきたらしい。

初めはビンタ程度だったのだが、いつの間にかエスカレートして、ついには殴るようになっていた。

だが、潤はその光景を見かけると勢いよく飛び出して行って止めに入っていたようだ。

けれどやはり体格は普通の小学生だったので、逆にやり返される、という事を繰り返していたらしい。

だが、初めに助けに出て以来、初めから潤に対してもちよくちよく暴力をするようになったみたいだ。

だけど幸い梓ちゃんに対しての暴力は一切なく、潤も心配をかけないように自分が殴られていることは一切言わなかったそうだ。

そういう生活を続けて一年ほどたった時、この事件が起きた。

潤はもちろん、もう中学生になっていた。

父親はそのころにはもう文字通りボロボロで、いつものように泥酔して帰って来ては母親に暴力をはたらいていたらしい。

そして、それを見た潤が止めに入って殴られる。

そんなことがいつものように行われて終わる。

そうなるはずだったんだが、潤が一生懸命に隠していたこのことをついに梓ちゃんに見られたんだ。

逆に俺はよく一年も隠せたものだと思ったが。

梓ちゃんは、それを見たとたん大泣きして父親に許しを請うたみたいだ。

父親はもちろんそれで許すはずもなく、今度は梓ちゃんに暴力をはたらこうとしたんだ。

……でも、それはただの暴力じゃなかった。

父親は梓ちゃんを捕まえて自分の部屋に連れて行き、まだ中学生にもなっていないその子に強姦をしようとしたんだ。

それを見た潤は、もう無我夢中で近くにあったものをとり、それを思い切り父親にぶつけたそうだ。

…それが、父親の愛用していたゴルフクラブだった。

潤が思い切りぶつけた場所がうつぶせに寝ていた父親の後頭部だったそうだ。

それによって致命傷にはならなかったが、全治するには何年もかかるものだったらしい。

後から駆けつけた警察には母親が憔悴し切った様子だったらしいが、事実をしっかりと伝えたそうだ。

潤はまだ14歳以下で触法少年だったことと、それに何よりだが、正当防衛であったことにより罪には問われなかった。

——触法少年と言うのは、児童福祉法が適用される年齢という意味だ——

だけど事件のあとに母親はやはり精神的に病んでしまって、母親はそのまま祖母たちと暮らしているそうだ。

ただ母親方は潤に対して嫌悪を示したわけではなく、自分たちと一緒に住もうと誘ってくれていたようだ。

だけど、潤は梓ちゃんの精神を心配し、少しでも噂の立つ可能性の少ない、この地域に引っ越してきたそうだ。

それで現在に至る。

そんな俺が受けた説明の内、強姦のところとか過激な部分を除いて潤は丁寧に説明した。

周りのみんなは当然のように黙って聞いていた。

そして、全ての説明が終わった。

周りの子たちからは潤に向かって同情の視線や、やはり恐怖の視

線が送られていた。

やっぱり、ダメか……

俺がそう思つて視線を落とすと、今までずっと黙っていた梓ちゃん
んが突然話しだした。

「あの、ち、違うんです。今の話は、違うんです」

おどおどとしているが、必死に俺たちに何かを伝えようとしている
のはわかった。

だけど、何が違うんだ？

俺が潤に受けた説明とほぼ同じなんだが。

「ほんととは、ずっと、知ってたん、です。お兄ちゃんも、お母さん
も、叩かれてたこと。だけど、わたし、こわくて」

そう言つて、必死に涙をこらえながら続けた。

「それに、それ以上に、お兄ちゃんに、謝らないと」

「梓、まさか……」

さっきまでと違い、今度は潤が焦つたように取り乱した。

「ほんと、こんなことをずっとわすれて……ぜんぶおにいちゃん
におしつけてたんだね」

「梓、やめろ」

「でも、もう自分で背負えるから」

「いい、やめろ」

「あるとき、襲われた時、あの人を叩いたのは……」

「やめろって……!」

「わたしだったんだから……!」

潤の止めようとする声と梓ちゃんの涙声が同時に響き渡った。

これは、俺も来末も全く知らなかった内容なので、さすがにビビった。

だけど、この状況は……

俺は周りを見渡した。

全員、まだ状況をちゃんと把握できていないようだ。

でも、把握しきった時、全員の恐怖の対象が潤から梓ちゃんに移るだけだ。

これじゃあ……

俺も来末もこの後をどう処理していいのかわからず、ただ黙るしかなかった。

そうして少しの間、この周りの空間を静寂が支配していたその時、人ごみの中から一人の少女の声が響いて来た。

「私は、例えば彼らにどんな過去があろうとも、友達でいる事をやめ

ないわ」

俺たちは、はっ、としてその声の主を見た。

——四乃さんだった。

四乃さんはゆっくりと俺たちの方に近づいてきた。

「私は、あなたたちのおかげで救われたわ。ずっと孤独だと思って
いた生活の中に楽しさを見出させたの。……だから、例えば昔に何が
あったとしても、私は今のあなたたちを見てる。今のあなたたちと
友達でいるわ」

その四乃さんの言葉に、俺は正直鳥肌が立った。

来未は俺の隣で四乃さんにつこりとほほ笑み、一歩前に踏み出
し、俺と潤を順番に見た。

俺もそれを見て、自然と笑顔になった。

そう……だな。

周りがどう動くかじゃない。

俺たちが今どう動くかが大切なんだ。

俺も四乃さんの方に一歩踏み出し、潤と梓ちゃんを見た。

「俺たちも同じ気持ちだ。お前たちがこれからどんな選択を選ぶの
かはわからない。だけど、お前がもし今日みたいにいじめられてた
ら、また助けてやるよ」

そう言って、出来るだけ安心させるように笑った。

俺たちの会話を聞いていた梓ちゃんは今もうすでに泣いていて、潤

がそれを抱きしめていた。

よし、じゃあそろそろ周りをどかせるか。

と思い、振り返った時、さっき来未に質問をした女の子が声を出した。

「わ……私も、く、来未ちゃんの友達なら、その……仲よくしたいかも」

そんな弱気な声を出した。

それはその子にとっては精いっぱいの勇気だったのだろう。

今この状況で声を出すという事は、つまりこの社会で明らかに不安要因だと思われる方に手を貸すわけで、つまりみんなから偽善と言われる可能性も孕んでいるのだ。

その中でもその子は最も怖い第一歩を踏み出してくれたのだ。

来未は、震えながら、その子に感謝を言おうと声を出そうとした。だけど、その声は出されることはなかった。

いや、もしかしたら出していたのかもしれないが、一俺には
・ 聞こえなかった。
なぜなら、

「わ、私も！ そ、その、来未ちゃんたちみたいに全く怖くないわけじゃないけど、でも、あなたたちが間違っていたとは思わないから……」

「俺もだ。その子はただ怯えて、潤はその子を守っただけだろう？
なら、俺には避ける理由がわからん」

同じような声がところどころから聞こえてきた。
それを聞いていた俺たちは笑顔で応え、潤は梓ちゃんを強く抱き

しめ、泣きながら笑っていた。

確かに世界には理不尽なことがたくさん溢れていると思う。

……実際、潤の過去は俺の過去と比べても、正直かなりシビアだ。俺は、俺に直接何かあったわけじゃないから。

だけど、たとえどれだけ嫌なことがあったとしても俺たちは生きて行かなくちゃいけない。

歩を進めて行かなくちゃいけない。

足を止めてしまったら、そこで全てが終わってしまうから。

潤たちが……俺たちが受け入れられたことは、他の人、似た境遇の人から見たら、奇跡のようなことに見えるかもしれない。

この学校が特別だったと言うかもしれない。

この友達が特別だったと言うかもしれない。

だけど、俺はやっぱり潤たちの心が、気持ち、皆に見えたからだと信じてる。

だから俺も、こいつらはもちろん、他の奴にも少しずつ心を開いていかなくちゃいけない気がする。

表面的な部分ではなく、しっかりとした中身で過去で。

次は俺の番だと、心に響いてくる声が聞こえた。

？俺と過去

次の日の朝俺は少し早めに家を出た。

潤の家の前に着いてからは、門のところで2人を立つたまま待った。

5分ほど待っていると、潤がいつものように梓ちゃんと一緒に出てきた。

「おう、おはよう、梓ちゃん！ それと……ついでに潤」

俺がそういうと、潤と梓ちゃんは少し驚いたように俺を見た後、ゆつくりとこっちに向かってきた。

「こ、こんにちわ、透也さん！」

朝なのにそんな挨拶を交わす梓ちゃんを笑顔で見ていると、潤も横から声を掛けてきた。

「よう、透也、えらく早いな。まあ一緒に行くか。ってか、俺をついでにするな」

おお、一息でよく言えたな。

俺は心の中で賛美を送っていた。

まあとりあえず、俺が早く来た時点で俺の意図には気付いてくれているようだ。

俺は潤のツッコミを表面的には無視して歩き出した。

しばらく3人で歩いていると、潤が何かを思い出したような仕草をした。

「そういえば、お前の可愛い彼女の緋香里ちゃんはどうしたんだ？」

潤はにやにやしながら、何故か梓ちゃんの方を向きながら言った。梓ちゃんはその言葉を聞くと、びくつと反応し、急に早口になって話した。

「と、透也さんは彼女じゃないって言うてたじゃない！ いちいち紛らわしい言い方しないで！ それと、緋香里ちゃんは私と同じ学年だってわかったから、もう緋香里ちゃんじゃなくてちゃんと飛野さんって呼んで！ 私の友達の名前で呼ぶの禁止って言ったでしょ！」

一息にそれだけを言うと、潤の方をキッと睨んだ。

おお、さすが兄妹。

早口が神レベルだな。

「わかった、わかった。だいたい名字知らなかったんだから仕方ないだろ」

そう言うて潤は梓ちゃんを宥めていた。

俺は、飛野って呼ばない方がいいと言おうと思ったが、飛野さんの場合はみんなに説明をするのを嫌がるかもしれないな、と思い直し、そのまま無言で歩いて行った。

校門前でいつものように別れると、俺たちは教室に向かって歩き始めた。

「どうやら、梓ちゃんの学校では何も起こっていないみたいだな」

俺がそう尋ねると、潤もほっとしたように言った。

「ああ。昨日確認に行った時も、梓は何が起こったのかわからなくてびっくりしてたみたいだったしな」

「そっか。まあこれで一件落着だな」

「ああ、今回はお前らに迷惑をかけたな。……ってか、お前、何で停学になってないんだ？」

確かに……。

俺も正直、停学になる覚悟で昨日は殴り合いをやったんだけどな。後で担任に呼び出された後は、何故か厳重注意とかよくわからないことで済ませてくれた。

ただ……

「今さらだけど、俺たちの担任は当たりかもな？」

俺がそう言くと、潤は首を傾げた。

「何でだ？」

「まず一つ目に、普通の教師なら昨日の現場を見つけた時点で生徒の話を聞く前に止めてる」

「ほっほっ」

「んで二つ目に、言ってなかったけど、情報が中学に漏れないように色々と配慮してくれたみたいだ。……ただ、もちろん生徒の間で漏らされたらどうしようもないけどな」

「マジかよ。そう言う事は先に言ってくれよ。俺、頭下げてくる」

「あ、おい！」

潤は言つてすぐに走り出して行つた。

さすがは行動派だな。

いや、シスコンか。

俺はそんなことを考えながら教室に入つて行つた。

昼休みに入ると、俺たちはいつもの面子で弁当を食いに屋上に上がつていた。

「よし、じゃあ食うか」

俺がそう言つと、みんな頷いて弁当を開けて食い始めた。

すると、潤は咳払いを急に始めた。

「えーっ、コホン。みなさん昨日は大変迷惑をかけました。むしろお世話になりました。来未ちゃんも俺のために……俺のために話をしてくれてありがとう」

なぜか、俺のためにを2回念入りに言っていた。

「うっん、別に、梓ちゃんのためでもあるからね」

そう、まあどっちつかずの返事をごはんを食べながらしていた。俺も少し気になっていたことがあったので、来未に尋ねた。

「そう言えばお前昨日、何か知らないこと、つまり情報量が少ないことが怖いとか言っていたけど、どう言う事だ？」

俺がそう言っていると、来未は箸を置いて話し始めた。

「いや、別にそんな大した話じゃないんだけど……。例えば、自分が生理的に受け付けない人が電車で隣に座ったらどうする？」

「うっん、まあ、少し離れる……。かな？」

「何で？」

「生理的に受け付けないんだろ？ ってことは、匂いとか……。特に見た目とかが無理だから、じゃないのか？」

「そうだね。つまり、苦手……。危険な感じが少しでもするからじゃないかなって思うの。見たことのない生物が怖いのも一緒。でも、もしも見た目が苦手な人が、例えば身内にいたらそのうち慣れて別に避けたりしなくなるよね？ 何で？」

「まあ、そりゃ、それはお前が今言ったみたいに慣れるからだろ。つまりは、そんなに危険じゃないってわかっていくから？」

「うん、そうだと思うの。つまりは、情報量が多ければ、人はその人に安心できるんだってことだと思うんだ。生まれながらに怖い人なんていないんだし」

「なるほどな。だから、例えばカエルとかの虫でも黒かったら毒がありそうで触れないけど、それが毒の無い生物だとわかったら触れる。って感じってことか？」

「うん。……カエルの例えはちょっと悪いけどね」

来未がそう笑いながら言うと、四乃さんと潤は興味深そうに、また、少し驚いたような顔をしていた。

「来未ちゃんって、意外にそんなことも考えているのね」

四乃さんの意外って言葉は無視して、来未は「えへへへ」と笑っていた。

「凄い、来未ちゃん天才！」

そう言っ、潤は来未の手をぎゅっと握って、真剣な顔で言った。

「来未ちゃんが今度困った時にはぜひとも俺に言ってね。絶対力になるから」

「う、うん……よろしくね」

来未がそう言っ、潤は自分の胸をどんと叩いて言った。

「任しといて！ もう大船……タイタニック号に乗ったつもりでい

て！」

そう言うと、来未と四乃さんは「はははっ」と乾いた声で笑っていた。

俺は、心の中でツツコンでおいた。
タイタニック号は沈むぞ……って。

そこで一段落がついた。

みんながもう一度食べ始めようとした時に、俺はみんなに向けて昨日考えていたことを言った。

「えっと、みんな。悪いけど、放課後またここに集まってもらっていいか？ 昨日のことで俺は……色々と考えたんだ。それで、俺が経験した出来事をみんなにちゃんと聞いてもらおうと思うんだ」

そう言うと、潤と来未は目を丸くして驚いた。

たぶん、俺からこの話をするとは思わなかったんだろう。

……まあ、俺も入学した時には全く思わなかったけどな。

だけどこいつらなら、こいつらだから聞いてほしいと思ったんだ。

俺の言葉の後、少し間が空いて、最初に返事したのは四乃さんだった。

「ええ、もちろん聞くわ」

残りの二人も同意を示してくれた。

そうして、残りの休み時間が10分程度になって半分ほど食べたころ、男女二人ずつのグループが俺たちに近づいてきた。

「「あのお」」

その声に反応して振り向くと、来未とよく一緒にいる子たちと潤とたまにつるんでいるやつらのグループだった。

「何だ？」

俺がそういうと、先頭にいた女の子が俺たちに向かって、おずおずと言った感じで言った。

「えっと、私たちも一緒にご飯食べたいなあ……なんて」

「え？」

潤は昨日の今日だったからだろうか、とても驚いていた。

四乃さんと来未はそれを見てニコニコとしていた。

俺は……まあ、言わなくてもわかるだろ。

潤もやっとな理解したのか、笑顔になって言った。

「ああ、いいよ、いつでも」

弁当も終わり、後半の授業も終えた俺たちは、昼休みの約束通り屋上に集まっていた。

今日は7時間授業だったので、空はもう真っ赤に染まっていた。

風は少し吹いており、軽く肌寒いという感じだった。

みんなは、昼休みの時と同じように座っていた。

みんなはもう準備出来てるみたいだな。

俺は全員の顔を確認した後言った。

「じゃあ、早速だけど、始めるぞ」

……

………

俺の家族は、俺と両親の3人家族だった。

俺の父さんと母さんは電気溶接の仕事を自宅ですべて、俺もたまに手伝ったりしていた。

家はそれなりに家計が成り立っていて、特に不自由なことはない暮らしだった。

ただ、家での仕事であり、父さんもそれほど喋る人じゃなかったから、友人が少なかったっていうのが唯一の欠点だったかな。

だけど、そんな父さんにも友人と呼べる人が出来たんだ。確か俺が小学生の低学年になった時ぐらいだったかな。

その人はいつも仕事を家に持ってきてくれたり、会社まで届けてくれる人だった。

名前は一橋勝也。

ゆったりとした……それでいて、どこかやさしさを感じさせるよ

うな雰囲気を持っている人だった。

うちの家族——って言っても、俺と母さんだけだけど——ともかなり親しくなっていて、一緒に食事をとったりすることも日常茶飯事になっていった。

これは、父さんから聞いた話なんだけど、その人には子供が一人いたらしい。

名前は……思い出せないけど、確か女の子だって言ってたはずだ。

ただ、すでに離婚していてその子と会う事も少なかったみたいだけれどな。

一橋さんは、自分の娘の写真を親父に見せては喜んでいたらしい。そんな……日々を暮らしていた。

本当にうちは平凡だった。

このまま大人になっていくんだろうな、と子供なりに俺も考えていたぐらい。

……だけど、そうにはならなかった。

うちに発注にくる仕事我突然減ったんだ。

何でかは、子供の俺にはわからなかった。

だけど、母さんに聞くと「不景気だからねえ」と毎回言っていたな。

父さんも母さんも必死に色々なところをお願いに回っていた。

父さんというか、母さんの人柄のおかげで少しは仕事をもらえたみたいだ。

ただやはり足りるわけがなく、数か月で貯金が底をつく、そんな状況だった。

その頃、俺は小学校の6年生になって間もないころだった。

父さんたちは丁度回るところを回り切り、もうどうしようかと思っていた時だったと思う。

その時に、あの人 came たんだ。

一橋勝也。

彼は仕事ではなく、お金を借りて、もっとお金の儲かる方法を探さないかと提案してきた。

もちろん、父さんはこの仕事に愛着を持っていたから、他の仕事を探すのは嫌だと言っていた。

だけど、父さんの唯一の友人と言ってもいい彼の粘り強さに負けて、とにかく資金は借りると言う事になった。

そして、ある事務所に連れて行かれた。

そこは、あるお金を担保として、なんと10倍までお金を貸してくれるというのだ。

普通ならありえない、そんな話だったのに、父さんは一橋を信じてしまった。

彼の友人だと言うその事務所の担当の人を信じてしまった。

父さんは、100万円…… たった100万円を担保にした。

だけど、その頃のうちからすると本当に大金だった。

かき集めた金だった。

それを担保に渡し、次の日にはうちの口座に1000万円が振り込まれる手はずになっていた。

まあ、ここからはもちろんわかると思うけど……振り込まれてなかったんだ。

だけど、父さんは一橋を信じてもう一日だけ待った。

それも、無駄になった。

その次の日、父さんはついにその事務所をもう一度尋ねることにしたんだ。

あるビルの3階。

そこを父さんは尋ねた。

けど、そこには誰もいなかった。

もぬけの空だった。

父さんは憔悴し切った様子で家に帰って来たよ。

そして、しばらく部屋から出てこなかった。

母さんも毎日心配していたな。

俺は学校に通っていたから、いつ父さんが部屋から出てきているのかすら全くわからなかった。

その日から3日ほどたった日、父さんは突然部屋から出てきた。母さんがどうしたのかと聞くと、父さんは「一橋から連絡が来た」とだけ言っ出て行った。

そして……父さんは帰ってこなかった。

翌日にテレビを見ると、あるビルで殺傷事件が起こり、犯人が逮捕されていた。

顔写真とともに。

犯人の名前は、武藤仁。

俺の父さんの名前だった。

………

………

俺が話し終わるとすでに周りは真っ暗になっていた。

誰一人声を発さず、沈黙が周りを支配していた。

「まあ、だいたいこんな感じだ」

俺がそう言うと、来未と四乃さんは目を伏せた。だけど、潤はまっすぐに俺を見ていた。

「そうか……。一応はニュースでお前の親父さんのことは知っていたけどな。クラスのやつらの反応でそれがお前だってこともこっちに来てすぐにわかったし」

「だろうな。まあ、それ以前に中学の時の俺は荒れまくってたしな。そのせいで、迷惑を掛けた人がいるんだから、俺の場合は自業自得さ」

俺がそう言うと、今度は四乃さんが顔を上げた。

「私もニュースでしか知らなかったわ。それに……。そのことを知ったのも最近だし。だけど、そんなことは関係ないでしょう。あなたはあなたなんだから」

そう、力強く言うとニツコリと笑ってくれた。

「ありがとう」

来末も、おどおどした感じで話し始めた。

「わ、私も関係ないと思うよ。透也は透也だし、それに、この学校に来て透也と会って私確信したもん」

「何を？」

「透也は、小学生の時から何も変わってないって！」

「……それは誉められてるのか？」

「も、もちろん！ あ、えっと、だから、その、透也は人に近づき

すぎない。そんなスタイルを取ろうとしているように、この学校に入ってきたときは見えたんだ。……人と距離も意識して取ってるし。だけど……変わってなかった。麗菜ちゃんの時もそう、二木君の時もそう。最後には絶対に自分で一步を超えてくる。だから、そういうところが昔と一緒だなんて」

こいつ、見かけによらず人の事をよく観察してるんだな。

「……こんな話をして、そういう反応が返ってくると思わなかったよ」

「う、うん……」

何でこいつまで照れてるんだよ！

俺は心の中でツツコミを入れた後、深呼吸をした。

「で、だ。俺が人に距離を取られていた理由……は元々知ってたか。俺が人と距離を取っていた理由はこれでわかってくれたと思う。俺は騙されるのも、嘘をつかれるのも嫌なんだ。だから、もし俺との距離を取りたかったら好きにしてくれ。俺はそのことでどうこうするつもりはない。それに、世間的に犯罪者の子は犯罪……」

「者……なわけねえだろ！」

潤がさっきまでと違い、キレたように言った。

「そんなんで、俺が……俺たちがお前と距離をとるわけねえだろ！俺はな……」

まあ、こいつらならこう言ってくれると思っていたけどな。

「ありがとう」

潤が何かを言おうとしていたけど、俺の言葉を聞いて止めた。

さて、じゃあどうするかな？

この空気で解散は中々言いづらいな。

うーん……。

俺が一人で唸っていると、来未が突然立ち上がった。

「よし！　じゃあ、今日の記念？　と言うか、私たちの友情のしるしにこのキーホルダーをみんなにあげよう！」

そう言うと、ポケットから同じ絵柄のキーホルダーを5つ取りだした。

そこには、この学校の校舎を校門のところから取った写真が写っていた。

俺は、それを受け取る前に、来未に一言だけ突っ込んでおいた。

「……友情のしるしって……言ってて恥ずかしくないか？」

「……言わないで」

本人にも自覚があったらしい。
ならいいか。

俺はそう思って、自分の携帯に付けておいた。

「で、何で5つなんだ？」

「あ、それは梓ちゃんのだよ」

そう言つて、潤には二つ渡していた。

「あ、ありがとう、来未ちゃん！ 梓も絶対喜ぶよ」

「いえいえ、どういたしまして」

来未はいつもの、えへへえゝ、と言つ顔をしていた。
……まあ、これで伝わるかな？

「あ、それなら……」

俺はあることを思い出して来未に言った。

「もう一つもらつていいか？」

俺がそう言つと、来未はきょとんとしていた。

「い、いいけど……。一応予備で6つ作っておいたから。で、でも、誰にあげるの？」

来未は興味津津と言つふうに聞いて来た。

「いや、緋香……。梓ちゃんの友達にあげるんだ。たまに潤とも一緒に来てるし……。なあ？」

俺は何で来未に言い訳してるのかもわからなかったが、とにかく

潤にふって誤魔化すことにした。

「ああ……透也の不倫相手の」

ビキッ

誰かからこんな奇妙な擬音が聞こえた……気がした。
俺のじゃなかった。

俺がおそろおそろ周りを見回すと、来未……だけじゃなく四乃さんも何故か震えていた。
というか、キレていた。

「ど、どういふことかしら、武藤君？」

「どういふこと？ 透也？」

な、何でこんな状況になるんだ！？

俺は、とにかく宥めるために必死に頭を回転させた。

「い、いや、違うんだ、二人とも！ 今のは明らかに潤の冗談で、別にこいつもそこまで二人が過剰な反応を示すとは思ってなかったと思うんだ。なあ、潤？」

俺は、頼む！ という気持ちを目にこめて潤に言ったんだが、

「さあ？」

と、よくわからないという仕草で返してきた。
いつもなら、こいつ、とか思うんだが、今日は直感的に俺は別の感情を感じていた。

あ、終わったな……

ただ、それだけだった。

結局、見周りの人が車で俺は意味もわからなく理不尽な理由で怒られた。

まあ、最後に何とか二人に緋香里との関係を説明しきって、キーホルダーももらえたけれども。

とにかく、今日の事はきっちり覚えておこう。

なあ、潤？

？俺と過去（後書き）

この過去話の手前の部分までが、私が高校時代に書いていたものをほんの少しだけいじって投稿したものです。よって、自分の昔話からは、最近書いたものになります。

？喧嘩と特別

あれから、2週間ほど平和だった気がする。

正直、俺は自分の過去をみんなに話した日から、毎日が少し清々しいくらいだ。

もちろん、次の日は結構何となくぎこちなくなってしまうたけれども。

「まあ……誰かに聞いてほしかったんだろな……」

結局はそう言う事なのだろう。

自分ひとりで抱えていくにはあまりにも重たかったから。

あまりにも悲しかったから。

だけど、涙は出なかった。

本当は自分の中ではある程度整理できていたのかもしれない。

ただ、それを周りにバレルのが怖かっただけで。

理解されるのが怖かっただけで。

だけど、俺はもうみんなに言えたんだ。

だから……

「よし、じゃあそろそろ行くか」

俺はタオルを手に持って外に出て行った。

公園に着いた。

いつもの公園。

もうすでに、待ち人は来ていたようだ。

「っていうか、俺の方が待ち人なのか」

俺は一人でツツコミを入れた後、その子に近づいて行っ

「よ！ 緋香里、待ったか？」

俺が声を掛けると、その子はパツと笑顔になったかと思うと、すぐに顔をブンブンとふって、

「い、いえ！ 今来たところです」

と言った。

なんか、このシーンだけ聞いてたら……

「こ、恋人みたいですわね……」

俺が思っていたことを緋香里が口にしたら、どうやら、同じことを考えていたらしい。

「そうだな。まあ、俺なんかとじゃ嬉しくないだろうけど。緋香里だったら、もつといい人いっぱいいるだろ？ 可愛いんだから」

「え？ か、かわ、可愛い？ わ、私がですか？」

俺の発言がよっぱど意外だったのか、顔を真っ赤にしながら答えていた。

「ああ、可愛いと思うぞ」

「ほ、本当ですか？ あ、あの、だったら……」

「梓ちゃんくらい」

「……………」

「……………」

「……………」

あれ？ 俺、なんか地雷踏んだ？

緋香里がなにかを言うのを待つべきだったか。
20秒ぐらい緋香里が停止してるんだが……

「え、えーっと……緋香里？」

「はい、なんですか？」

なんか、心なしか声が冷たいような……

「な、なんか気に障ったのか？」

「いえ、ぜんぜん、まったく、これっぽっちもそんなことはありませんよ」

「そ、そうか。なら、よかった」

よかった。

気には触ってなかったみたいだ。
声もあんなにクールだし……

って、んなわけあるか！

「いや、えっと……そうだ！ ジュース飲むか？」

「いりません」

うーん、これはもうどうしようもないな。

俺にだってどうしようもないことは……たくさんある。
ということだ、

よし……走るか。

俺は以前にも緋香里を同じような状態にしたことがあり、その時
もどうしようもなかった……

という経験から、ランニングをしてから謝る、という方針に切り
替えることにした。

「じゃあ、えっと、走ろっか？」

俺がそう言っていると、無言のまま頷いて、俺の後について来た。

俺、こんなに弱いキャラじゃなかったはずなのにな……
どこで変わったんだろ？

……っていうか、どこで小学生の時のキャラに戻ったんだろ。

俺はそんなことを考えながら、公園を2周していた。
ちなみに、公園は一周600mだ。

お互い、少しだけ疲れが見えてきたとき緋香里がようやく話し始めた。

「先輩って……どうして私は呼び捨てなのに、梓ちゃんは”ちゃん”をつけるんですか？」

「どうしてって……」

そんなことが気になっていたのか？

まあ、大した理由じゃないんだけどな。

「隠してるわけじゃないから言うけどな、俺が初めて梓ちゃんと会った時が、その、潤と喧嘩した後でな……」

俺は話しながらその時の情景を思い出していた。

……

……

俺が潤と会ったのは、去年の丁度今ぐらいだった。

あの頃の潤は梓ちゃんのために何回か転校を繰り返していて、そしてここにたどり着いた、って言ってたな。

俺もその頃はちょっと荒れてて、気に入らないことがあつたらすぐ喧嘩をしていた。

そんなある日の夜、繁華街で喧嘩をしてる潤を俺は見かけた。その時はもちろん俺は話しかけるつもりはなかったし、無視して横を通り過ぎようとしていた。

だけど、出来なかった。

あいつの目があまりに俺に似ていたから。

その時の俺に似ていたから。

俺は無意識のうちに潤のことを見ていた。

喧嘩を終えた潤は唾を吐いた後、俺の方に向き直った。

「……なんか用か？」

そっけなく、けれど威圧感を込めて俺にそう言ってきた。

俺も無視をすればよかったのにな……

「別に………お前、なんでそんな死人みたいな顔してんだ？」

「!？」

俺の言葉が癪に触れたのか、急に態度を一変して俺の胸倉を掴んできた。

「はぁ!？ ……お前に言われる筋合いねえよ!」

俺はその手を振り払わず、ただ潤の顔だけを見ていた。

「俺、お前見てるとなんか以上に腹が立ってくるんだけど」

「奇遇だな！俺もだよ。……ちよつと、軽く挨拶でもしとくか」
そう言つて、俺を掴んでいた手を離れた後、ファイティングポーズをとつた。
俺はその時、本当に理由がわかつていなかったのだが、ただむかつくと言つ理由だけで喧嘩をした。

……

「はあ、はあ……」

「はあ、はあ……」

お互いに正直、互角だつたと思う。
俺は生まれてはじめて、喧嘩を10分もした。

「お前……結構やるな」

先に口を開いたのは、そいつの方だつた。

それは、こつちのセリフだ。

俺は心の中でそんなことを呟いていたが、言葉には出さなかった。

「お前、なんでこんなところ一人で歩き回ってるんだ？」

そいつが突然質問を言い始めたので、仕方なく俺も話し始めた。

「別に……理由なんてねえよ」

「……そっか」

「……」

「……」

そこからまた30秒ほど沈黙があった。
次に先に口を開いたのは……俺だった。

「お前は……」

「あ？」

「お前はなんでこんなところぶらついてるんだ？」

俺がそう言つと、少し苦しそうに下を向いた後、こちらを向きなおした。

「俺は……ただ、人を少し信じれなくなっただけ……」

「……」

「俺があいつを守ってやるつもりだったんだけどな……ちょっと疲れちゃった……」

俺はこいつが何の話をしているのかは全くわからなかった。

ただ、この時にやっと気づいたんだ。
こいつは俺に似てるっ……て。

「は、はは」

俺は急に笑いがこらえられなくなつて、気が付いたら笑っていた。

「お前……なに笑っ……て」

そいつは俺に文句を言おうとしたが、最後まで言い切らなかった。

「お前……」

俺の顔をまじまじと見ていた。

「お前……何で」

そして、息を飲んでから言った。

「お前……何で泣いてんだ？」

そいつの言葉は正直俺にとっての方が意外だった。
だって、俺も自分が泣いていることに気が付いていなかったから。

「あれ？ な、なんでだろうな。ただ、お前が可哀そうなやつだな
と思つてよ」

俺は嫌味とかではなく、ただ本音を言っていた。
そいつもそれには気がついてたようだ。

もしかしたら、俺と同じように自分と似ているという事にも気が
ついていたのかもしれない。

数秒、そいつは固まっていたが、俺に尋ねてきた。

「お前、名前は？」

「武藤……武藤透也」

「そっか、俺は二木潤だ」

………

っていうのが、俺と潤の出会い。

あ、梓ちゃんとの出会いを言ってなかったな。

まあ、こっちはかなり単純なオチなんだけど。

俺たちが喧嘩をしたあと、潤がどうしても自分の家に来てくれと
言うもんだから俺はついて行った。

俺が頑張っている理由をお前に見せる。
とか言うもんだから。

ついて行くと、ボロいアパートに着いた。

……まあ、今の潤の家だな。

そのこのアパートの入口に小さな女の子が立っていた。
そして、俺たちの姿を見ると、突然こっちに走り出てきた。

「梓！」

潤がそう叫ぶと、潤の隣まで走って来て……そして、潤を俺から庇うように立って、泣きながら叫んでいた。

「お、お兄ちゃんをいじめないでください！」

「？」

俺は何が何だかわからなかったが、その子はどうやら俺が潤をいじめたと勘違いしたらしい。

……まあ、事実でもあるけどな。

「あ、梓！ 違うつて！ こいつは……」

潤が何を言おうとしても、泣いて聞こうとしなかった。

はあ、仕方ないな……。

「あ、えつと……梓……」

これだと少し威圧感があるか。

えつと……

うーん、これは使ったことが無かったから嫌なんだけどな……
仕方ない。

——梓ちゃん

……

……

「と、言うわけだ」

俺がそう言っと、じっと黙って聞いていた緋香里は納得したのか、頷いていた。

「なるほど……そういうことだったんですか。……でも、やっぱり梓ちゃんだけ特別なんですね」

まあ、そういうことにはなるな。
だけど、これは仕方ないことで……

俺はそう言おうとしたんだが、俺が言う前に緋香里は一人で納得してくれたみたいだ。

「まあ、仕方ないですね」

「そういうことだ」

そこまで話し終わったところで、俺たちは公園を6週ほど走っていた。

本当、この子は体力あるな。

「じゃあ、そろそろ終わろうか？」

「はい、私も疲れてきたところです」

そう言って、ゆっくりと停止した。

「さて、それじゃあ、解散するか」

俺がそう言うと、走り出す前のようにまた緋香里は黙ってしまった。

実は、今日は休日で学校が無いんで、俺はこれからシャワーを浴びてバイトという予定だ。

そのことは、緋香里も知ってるはずなんだけど……どうしたんだろうな？

「え、えっと……」

そう言ったまま黙ってしまった。

また、さっきみたいになったらどうしようもないしな。

「どした？」

俺は、出来るだけ安心させるような口調で言った。

すると、俺の気持ちを通じたのか、ゆっくりと口を開いた。

「あ、あの……こんなことを言ったら、先輩を困らせるのはわかっているんですけど……」

「いいぞ。言ってみろ」

「実は最近……」

「……」

「家の近くに着くと、誰かに見られてる気がするんです」

それは、ストーカーってやつか？

「そいつはどんなやつだ？」

「い、いや、怖くてちゃんと見たことが無いんです。ただ、本当最近になってからで……たぶん3日前ぐらいからだと思います」

なるほどな。

これは、ちゃんと見張ってあげた方がいいな。

「それは、だいたい何時ごろからだ？」

「だいたい、家に帰宅する時間なんで、7時前か、そのぐらいだと思います」

丁度暗くなったあたりだな。

「よし、わかった。じゃあ、とりあえずバイトは5時までだから、又終わったら連絡するよ」

「あ、ありがとうございます」

そう、嬉しそうに返事した。

とりあえず、全部、バイト終わってからだな。

俺はそう考え、緋香里とそこで別れてバイトに向かった。

？デートとストーカー

……結局、あのあと俺は緋香里に電話をして緋香里に会いに行った。

だけど、その日はストーカーとかは全く出てこなくて、何も問題はなかった。

よかった、よかった。

本当にそう思ってただけで、なんでこうなったんだろ？

俺は今、緋香里と遊園地に来ていた。

……！？

この時点でわけがわからないだろ？
俺もわからん。

……と、とにかく、昨日を思い出そう。

……

……

「えっと、あの、先輩。今日はありがとうございました」

俺たちは緋香里の家の手前の門の所に立って話し込んでいた。かれこれ30分ぐらひはこうしてたかな？

「ああ、全然問題ないぞ」

俺はバイトの帰りに寄っただけなので、本当に何も問題はなかった。

「今日は大丈夫そうだな」

「はい！ きつと、先輩を見てどこかに逃げちゃったんですよ」

……なんでこんなに嬉しそうなんだろ？

まあ、この子に限って嘘なんてことはないだろうけど。

「よし、んじゃあ、緋香里の無事も確認できたことだし、俺はそろそろ帰るよ」

「あ……」

俺がそう言っただけで立ち去ろうとすると、突然俺の袖を引っ張ってきた。

「どうかしたのか？」

「あ、あの、えっと……やっぱり、まだ怖いわけで……」

何か言いにくいこともあるのか、少しどもりながら話していた。

「そうだな……。でもこればかりは仕方ないからな。俺が緋香里の家に泊まるわけにもいかないし……」

「別に……それはそれでいいですけど」

「え？」

俺は、緋香里が小声で言った言葉が聞き取れず、思わず大きな声で聞き返していた。

「い、いえ、そうじゃなくて……。今日は多分もう大丈夫だと思うんですよ。だけど、やっぱり明日も不安だなって……」

なるほどな。

じゃあどうするか……。

明日は一日中予定が空いてるが。

俺がそんなことを考えていると、緋香里はそのまま会話を続けた。

「そ、それで……明日、丁度海の日だし、先輩、予定空いてるかな？　って……」

「まあ、一応予定は全くないけど……」

俺がそう言つと、急に顔をぱつと輝かせて言った。

「じゃあ、遊園地に行きましょう！　」

……はい？

「あ、え、えっと……明日遊園地に一人で行く予定があつたんですけど、やっぱり怖いから、先輩にも付き合っしてほしいなあ……なんて」

「ああ、そうなのか。一人で遊園地に行くつもりっていうのも、結構凄いな」

俺がそう言うと、少しひきつった笑みをしていたような……

「それに、チケットだってもう間に合わないんじゃないのか？」

「い、いえ、たまたま私2枚チケットを持っているんで」

「……そ、そうか。じゃあ、せつかくだし行くか」

「は、はい！」

………

………

という流れで来ていた。

なんか、昨日は緋香里に圧倒されて来てしまったけど、やっぱり

ストーカーとあまり関係ないような……。

俺はそんなことを考えながら歩いていたんだが、先に前を走っていた緋香里が戻って来て、

「先輩！ 次はあれ！ あれに乗りましょう」

と楽しそうにはしゃいでるのを見て、まあいいか、と思ってしまった。

だけど………

この絶叫厨が。

俺は心の中でそうツツコまざるをえなかった。

だって、今まで乗ったものが、ジェットコースター↓コーヒーカー
ツプのやつ↓ジェットコースター↓船のやつ↓ジェットコースター
だぜ。

ちよつとやりすぎだろ。

俺はすでにへとへとになっていて、情けないことに俺から休憩を申し出さざるをえなかった。

「はぁ……… 緋香里は元気だな………」

俺がそう言つと緋香里は頬を少し膨らませて、

「子供扱いしないでください！」

と言った。

あれ？ この子こんなに気が強いキャラじゃなかった気がするんだけどな。

これが噂の、遊園地マジックか……

……いや、そんな噂あったか知らないけどな。

「子供扱いしてるわけじゃないって。それに、緋香里は……」

「？」

「……」

俺は緋香里を見た後、心の中で呪文をひたすらに唱えて、言葉を寸前のところで止めた。

ふう、危ない危ない。

R - 15 , R - 15。

「なんですか？」

「いや、とにかく緋香里はもう大人だよ」

俺の言葉には到底納得できないようで、緋香里はまだツンとしていた。

仕方がないな……

「よし、じゃあ俺がテストしてやるよ」

「テストって……どうするんですか？」

「いや、構えなくても、別にそんな大したことないって……」

そうやって俺は、自称遊園地の一番のメインイベントである、あの施設を指さした。

ふっ。

俺は心の中での笑みを出さないようにしてその施設、つまりお化け屋敷を指さしていた。

誰もが一度は経験したいであろう、女の子とお化け屋敷体験だ。……ただ、あれだけ絶叫マシーンにビビらない緋香里がビビるのかという問題があるが。

そう思っ、緋香里の方を見ると、もうすでに足がガクガクと震えていた。

「あ、あれですか？ ……あの、あの上から一気に落ちる絶叫マシーンとかじゃ駄目ですか？」

「ダメ」

「……どうしてもですか？」

「どうしても」

そう言っ、しばしの間俺たちは睨みあっていた。

「……………」

「……………」

「……………ぽっ」

「？」

「わ、わかりました。そこまで先輩が言つのなら……………」

と、急に折れてくれた。

なんだかよくわからないが、よかったよかった。

「よし、じゃあ早速行こう」

俺はさっきまでの疲れも吹っ飛び、緋香里の手を取って、急いでお化け屋敷に向かった。

途中で緋香里が何か言ってた気がするけど……………まあいいか。

お化け屋敷にたどり着くと、正面のところに宣伝文句が書かれていた。

”日本で7番目に怖いお化け屋敷”

……………びみょー。

俺はそんなふうに使っていたが、隣にいる緋香里はというと、

「だ、大丈夫。私はもう15歳。大丈夫。私はもう15歳……………」

とひたすらに繰り返していた。

なんか、悪気が……

そんなふうに思い「やっぱりやめるか？」と言おうとした時、

「行きます！」

と言って、緋香里は先に入って行ってしまった。

はぁ……仕方ないな。

俺はいつものそんな口癖のようなものをいい、後から入って行った。

緋香里は先になんと進んで行ったと思っていたんだが、30秒ほど歩いたところでもう合流した。

俺は緋香里に声を掛けたが、緋香里はうんともすんとも言わなかった。

俺は不安に思い、緋香里の前に回り込んだ。

すると緋香里はガタガタと震えながら前の一点を指さしていた。

そこには……井戸があつた。

まあ、俺はお決まりだな……とか思つて、緋香里にもう一度声を掛けた。

「おい、緋香里、あれは大丈夫だ」

「え？ な、なんで先輩わかるんですか？」

「いや、定番と言っかなんというか……」

俺は、とりあえず、著作権の話から始めて、その悪霊の話の簡潔にした。

「な、なるほど。じゃあ先輩、先に確認してくれませんか？」

「……ああ、いいぞ」

まあ、ネタがわかってるからと言ってビビらないかと言われれば
そう言うわけでもないわけで……。

俺はゆっくりとその井戸に近づいて行った。
後ろを見ると、緋香里はさっきの場所から一步も動いていなかった。

さっさと済みますか。

俺はそう思い、井戸の下をゆっくりと覗いた。
すると……

「あれ？ 誰もいないぞ？」

俺は予想が外れてきょとんとしてしまった。

井戸の下は空洞になっていて、かすかに水が入ってる感じがある
だけだった。

まあ、何もないならいいか……

そう思い、俺は後ろを振り返って緋香里に言おうとした。

「おい、ひか……」

「ぎゃー……」

俺がセリフを言う前に緋香里は一目散にゴールの方に走り出してしまった。

何事かと思い、俺が再び前を向くとそこには……

なんか……

頭に矢の刺さった侍っぽいのが井戸にへばりついてた。

俺はそいつを10秒くらい凝視して思ったんだ。

………えーっつ。

俺がダツシュで緋香里を追いかけると、すでに緋香里は外に出ていた。

追いついて緋香里を呼んでみても、荒く呼吸をしているだけで何も反応はない。

うーん……

ここは……

俺はしばらくどうするか思案したが結局この結論に行きついた。

「緋香里、すまん」

俺がそう言うと、俺の存在をようやく認識した緋香里が、こっちを見てくれた。

「え……あ、何がですか？」

「いや、緋香里はお化け屋敷を嫌がってたのに、半強制的に連れてきちゃって……」

「いえ、別に嫌だったわけじゃ……」

そこで再び沈黙。

お互いに何を話そうか考えてる……そんな感じの時間だった。唐突に口を開いたのは緋香里の方だった。

「あ、あの！　じゃ、じゃあ……最後に観覧車と一緒に乗ってくれませんか？」

俺は緋香里の提案が意外だったので、少し反応が遅れてしまった。

「あ、ああ。そんなことでいいんならお安い御用だ」

そして、二人で観覧車に乗った。

………360度透明の。

「な……なあ緋香里？　これ、結構怖くないか？」

「全然！　景色いいですよね」

俺の気持ちもつゆ知らず、緋香里は観覧車の中で動き回っていた。

あ、あぶねえ……

女の子との観覧車がこんなに怖いものだったとは……

俺は俺の中で新たな固定概念が形成されていくのを一人で感じていた。

まあ……とにかくにも会話をしないとな……

俺はそう切り替え、緋香里に話しかけた。

「なあ？ 緋香里の御両親は何をされてるんだ？」

俺がそう言うと、さっきまではしゃいでたのに、急に黙りこくって、俺の向かいにゆっくりと座った。

「……母はパートで、父は……」

あ、これ、話題ミスった？

「父は……無職です」

「そ、そうなのか？ じゃあ、家にいるってことか？」

「いえ、たぶんこの町を徘徊してたらいずれ会えると思います」

「……そ、そうか」

なんとも重い雰囲気になってしまった。

俺は空気を壊した後、しばらく何も話せなくなってしまった。

観覧車はゆっくりと回転し、いつの間にか頂上、てっぺんまで来ていた。

そして、先に口を開いたのは緋香里の方だった。

「あの……」

「ん？」

「今日は本当にありがとうございました」

「いや、いって。俺も楽しかったし」

「本当ですか？」

「ああ、もちろん」

俺がそう言うと、やっと緋香里が笑顔を見せてくれた。
俺はほっと息をなでおろし、続けて言った。

「緋香里は、どうだった？」

「え？ あ……も、もちろん楽しかったですよ。今までで一番かもしれない」

「本当か？ それならエスコートしたかいがあるよ」

俺はそんなふうになでかけて言ったんだが緋香里は、

「はい……」

と言ったまま黙りこくってしまった。

そうして、今度はなんだかそわそわするようなそんな沈黙が出来

あがってしまった。

こ、ここは男として何か言わないとな……。

俺はそう思い、ゆっくりと深呼吸をした後、緋香里に言った。

「緋香里？」

「は、はい」

「実は俺、お前の……」

「え？」

「……」

「……」

「お前の、運動神経凄くなって思ってたんだ」

「はい？」

……言えた。

やっと言えたぞ。

「いや、だから、いつも走っている時、お前疲れないじゃん？
だから、凄いなって。あ、もしかして結構有名な選手だとか？」
だ

「……」

俺の質問に緋香里は黙りこくっている。

もしかして、恥ずかしがっているんだろうか？

俺がそう思った時、緋香里は緊張が解けたようにゆっくりと息を吐いた。

「はい、一応結構陸上では早い方だと思いますよ」

「そうなのか。ちなみに100mどのくらい？」

「12秒ジャストです」

……早いな。

俺のベストと変わらないじゃん。

「それは……男としては少しショックだな……」

「え？ な、なんでですか？」

「いや、プライド的に女の子よりは早く走りたいじゃん？」

「そ、そんなものですか？」

「そんなもんだよ」

そんな感じで会話は終わり。

俺もその後は踏み込んだ会話は特にせず、普通に楽しんで下りた。俺たちはそれをラストにして、もう家に出発した。

途中では他愛もない会話を繰り返して歩いていると、いつの間にか緋香里の家の前についていた。

「よし、じゃあ今日はここまでだな」

「はい、本当にありがとうございました」

さつきから何度目になるかわからないお礼を緋香里は口にする。

「いや、いいって。んじゃあな」

「はい、それじゃ……」

緋香里が最後に手を振ろうとした時、緋香里の目が突然驚愕に見開かれた。

「あ……あ……」

「ど、どうしたんだ？」

「せ、先輩、あそこ……」

緋香里の指の先を追う。

すると、なんかカメラを持った金髪の男がそこにはいた。

「あいつか？」

俺がそう尋ねると、緋香里はこくこくと頷いた。

俺はダッシュで走りその男を追うと、そいつは一目散に逃げ出した。

だけど……俺の方が足が速い。

俺はぐんぐんと距離を詰めていく……

後10m程度。

俺がそう思った時、パツと後ろを振り返ったそいつの顔が一瞬見えた。

「えっ？」

俺は、訳がわからず、ついスピードを緩めてしまった。
そのすきにそいつは角を曲がり、どっかに行ってしまった。

えっ？

なんで、あいつが……

俺は犯人の顔に覚えがあった。

というか、いつも顔を合わせていた。

俺は緋香里に報告しに行く気になれず、その場でしばらく立ちすくんでいた。

なんで、お前がそんなことしてるんだよ？

潤……

？写真とあいつ

結局昨日はあいつに直接聞きに行くことが出来ず、寝不足だった。
俺は少し寝ぼけながら学校に行った。

教室のドアを開けると、すでに潤は登校していた。

………

聞くしかないな。

俺はゆっくりと潤の所に近づいて行った。

「おい、潤」

「ん？ おお、透也か。おはよーさん」

潤はいつもと変わらない様子だった。

「ちよつと、今いいか？」

俺がそう言うと、全く何も気にした様子じゃなく「ああ、いいぜ」と言っ
て、他の友達の輪から出てきた。

俺はそのまま屋上に行こうと言って、潤を連れてきた。

「で、だ」

俺は早速本題に入ることにした。

「お前、昨日……緋香里の家の近くにいたよな？」

俺がそう尋ねると、潤はけろつとした顔をしていた。

「ああ、いたけど……それがどうかしたか？」

俺はその言葉を聞いて愕然とした。

やっぱり、昨日のは見間違いじゃなかったんだな。

「お前……最近ずっと緋香里の周辺をうろついてないか？」

「まあ、そうだな」

……

なんだこの反応は？

「お前、いったいどういうつもりなんだ？ あいつはお前だと気づいていないが、ストーカーが最近いると言ってビビってるんだぞ」

「ああ……。そういうことね。確かにあんなことしたらストーカーみたいなもんか」

そう言つて、ははっ、と乾いた笑いをしていた。

俺は怒りが急に込み上げてくるのを抑えるので必死だった。

「お前……自分が何やってるか気づいてんのか？ お前はそんな陰険なやつじゃないだろ」

「……俺は陰険だよ。……で、それがどうかしたのか？」

「——っ！——！」

俺はもう限界だった。

気が付いたら潤を思いつき殴っていた。

「どうかしたのか？ …… って何だよ！ どうかするに決まってるだろ！ お前…… いったい何がしたいんだ」

「…………… 言わねえ」

俺の言葉にそれ以上潤は答えず、黙りこくっていた。

俺はまた怒りが込み上げてきたが、今度は何もしなくても急に冷めてきた。

「そうか…… お前が言わないってんなら、かまわねえよ。俺も勝手にするよ」

そう言って、俺は先に教室に戻った。

潤が後ろで囁いた声が風に乗ってかすかに聞こえた気がした。

「…………… 言えるわけねえだろ」

授業を終えると、俺は一目散に緋香里の所に行った。

正直、緋香里がどうか思ってた俺は動いていたのかどうかかわからない。

ただ、俺は何も話してくれなかった潤にいらついていたただけなのかもしれない。

呼吸を乱しながら緋香里の家につきインターホンを押したが、緋香里はまだ帰っていなかった。

俺はしばらく家の前で待つことにし、今までの事を整理していた。

潤は、あんなことしてるんだ？

普通に考えてあいつが単純に緋香里の事が気になってストーカーをする可能性は皆無だ。

それだけは断言できる。

だとしたら後は何だ？

あいつの行動理由は基本的に梓ちゃんの事だ。

だけど、今回は関係が無いような気がする……。

緋香里と梓ちゃんは同じ学校だけど、仲が悪くなっただなんて話はどちらからも聞いていないからな。

あいつはいつからこんなことをするようになったと言った？

確か、5日前。

この日の近くに何かあったか？

一緒に遊んだ事か？

一緒に周りのやつと少しずつ打ち解けて言った事か？

それとも

……俺が過去の話をしたことか？

俺がそんなことに考えついたとき、丁度緋香里が帰ってきた。

「おお、緋香里」

俺がそう言っただけで緋香里に手を上げて合図を送ると緋香里は一瞬ビツクリした後、俺の方に走って近づいて来た。

「え？　せ、先輩、なんでこんなところにいるんですか？」

「いや、緋香里が心配だったからさ」

俺がそう言うと、緋香里は少し顔を赤くして言った。

「え、そ……そうですか。えーっと、それじゃあ中に入ります？」

「え？」

「い、嫌ならいいんですけど……」

「いや、そうじゃなくて、中に入っているのか？ 緋香里、なんか家は嫌そうにしてた気がするんだけど」

「いや、さすがにここまで来てもらっててそんなこと言えないですよ。それじゃあ、開けますね」

そう言うと、すぐに鍵を開け、俺を緋香里の部屋まで通してくれた。

俺は実は小学生の時に女の子の部屋に入ってから今まで一度も経験が無かったもんだから、内心少し緊張してたりしてた。

「へえ、緋香里の部屋って片付いているんだな」

俺が素直な感想を漏らすと、お茶を汲んで来ていた緋香里は少しよろめいていた。

「あ、あんまり見ないでくださいね。準備とか何もしてなかったんですから」

俺はそのセリフを聞いて、

準備って何だ？

とか思ったが、聞かないでおくことにした。

緋香里の部屋は普通……かどうかは俺には判断がつかないが、俺の部屋と違い、小物で溢れていた。

その中で、目についた面白そうなものについて手が伸びた。

「なあ緋香里？　これ何だ？」

「え？　あ……それは私が幼稚園の時に作った粘土の……なんていえばいいんでしょう？」

俺の質問にそんなふうに苦笑しながら緋香里は答えた。

そうか。

幼稚園の時のものを飾っているなんて珍しいな。

「緋香里はこういうのを飾るタイプだとは思わなかったよ」

「そうですね……私も、似合わないな～と思います」

「いや、別に似合わないとは思わないけど……」

ただ、女の子の部屋にはあまり似つかわしいものではないと思っただけだ。

「そう……ですか？　……実は、それは昔お父さんが誉めてくれたものなんです。あ、お父さんと言っても今の……じゃなくて昔の……ですけど」

ああ……そういう事か。

「それで……ってわけか。なるほど。納得したよ」

「余計に子供っぽい理由ですけどね」

「いや、緋香里らしいなって思えたよ」

「……それって、私が子供っぽいってことですか？」

そう言う緋香里の声にわずかばかり怒気を感じ取った俺は、さすがフオローを入れておいた。

「そんなわけないだろ？ 緋香里は逆にもっと上に見えるよ」

「……………」

だけど、緋香里は俺の言葉を聞くと黙り込んでしまった。

なんでだろ？

大人っぽいつて言っただけなんだけども、もしかしてそっちも嫌だったのか……。

俺はそんなふうに思考を巡らしていたが、結局何がなんだかわからなかった。

「……………」

「……………」

いかな。

そろそろ話題を作らないと。

緋香里が喜ぶ話題……緋香里が喜ぶ話題……。

そこで、ふと一つの事に思い当った。

「ああ、そう言えば緋香里のお父さんってどんな人だったんだ？」

俺が突然そんな話を振ったので、緋香里は少しきよんとしていたけど、すぐに返事をしてくれた。

「えっと……だった……ってことは、昔の、ってことですよね？」

そうですね、幼稚園の頃くらいの記憶しかないんですけど、優しかったですね。私が公園で……」

こんなふうに話し出して、緋香里は止まることなく話をしていた。俺はただひたすらに相槌を打つだけ……という感じになってしまったけれど。

話をしている緋香里がただ楽しそうだったので俺は、まあいいか、とも思ってしまった。

でも……

……

「それで、ですね……」

……あれ？

「そのあと、私が鉄棒をしていた時なんかですね……」

………これ、終わるのか？

「それで、幼稚園の中で演劇が……」

………よし。

「あ、あのさあ」

俺はさすがに時間が遅くなってきてしまったので、途中で話を仕方なく、あくまで仕方なく切ることにした。

緋香里はもちろん、突然話の腰を折られてしまったので、きょとんとしていた。

「は、はい、なんででしょう？」

「えっと、俺、そろそろ時間が……」

俺はそう言っ腕時計を指さした。
時間はすでに8時手間を指していた。

「え？ もうこんな時間なんですか？ わあ、夕食作らないと……」

「そうだな。 んじゃあ、俺はそろそろ」

俺がそう言っ、立ち上がるうとした時、

「……先輩、今日はこの後何か予定があるんですか？」

緋香里が突然こんなことを口走った。

え？

これ、何のフラグだ？

「あ、まああると言えばあるし、無いと云えないような……」

気がつけば、俺も今まで帰る気だったのに、こんな返答をしていた。

……べ、別に、何か期待したわけじゃないんだからね！

「それじゃあ、もう少しだけ残ってくれませんか？ 親も今日は遅いはずなんで……」

そう言っ、緋香里は立ち上がり、奥の部屋に歩いて行った。
俺ももちろん付いて行った。

.....

約30分後。

「ど、どう……ですか？」

「ああ。とっても……いい感じだな」

「本当ですか？ それは……よかったです」

「もう少し、いいかな？」

「はい……」

こんな感じで、会話が弾んでいた。
俺は緋香里の家で……

夕食を頂いていた。

「ど、どうですか？」

「ああ。とっても、この唐揚げ、いい感じだな」

「本当ですか？ それは良かったです」

「もう少し、いいかな？」

「はい、もちろんです！」

実際は、こんな感じの会話だった。

さつきは、多少俺の妄想補正が入っていたかもしれないが、気にしないでくれ。

「いや、それにしても、手慣れてるな。よく作ってるのか？」

「あ、はい。まあ、一応女の子ですから！」

「そうか」

こんなふうに明るくふるまっているけど、たぶん親が遅いんだろ
うなと俺はぼんやりと思っていた。

まあ、俺はそんなこと言っつもりもなかったから、どんどん食べてしまった。

「よく食べますね」

俺の顔を見ながらニコニコとして緋香里がそう言った。

「そうか？ こんなもんだろ。……まあ、この飯うまいしな」

「ありがとうございます」

こんな感じで、いつの間にか料理を食べきってしまった。

「ふう、ごちそうさま。今日はマジでありがとな」

「おそまつさまでした。いえいえ、気にしないでください」

「じゃあ、今度こそはマジで帰るよ」

「はい、わかりました」

俺はそう言っ、もう一度緋香里の部屋に荷物を取りに行った。
緋香里は先に玄関の方に行ってしまった。

俺はゆつくりと緋香里の部屋を観察……もとい、荷物をわすれていないか確認した。

まあ、また来るかわからないしな。

俺はそんなことを考えていたが、忘れ物がないことが確認できたので、俺はゆつくりと玄関に向かって歩き出した。

……つもりだったのだが、緋香里のベッドの横に置かれていた写真にどうも既視感を感じて知らないうちにそっちに向かっていた。

なんだろう？

緋香里の知り合いで既視感を感じるなんて……

俺がゆつくりとその写真を取ると、そこには三人の人が写っていた。

緋香里……？

これは幼少期のやつだな。

ってことは、これが緋香里のお母さんで、こっちが緋香里の……

そう、緋香里のお父さんを見たとき、俺の中に電撃が走ったような痛みが走った。

なんだ、これ？

俺、緋香里の親父さんを知っているような……

俺の中でぼんやりとしていたものが少しずつ形になっていく。

「——っ！——！」

そうして、一つの答えに至った。

俺は思わず頭を抱えていた。

そう、俺は緋香里のお父さんを見たことが実際にあったのだ。

「あ、あああ、あああああ……」

それも、緋香里の両親が離婚した後に。

「な、なんで」

俺の家によく通って俺たちによくしてくれていた人。

「お前が……」

——そして、裏切った人。

「一橋」

？仇と慈愛

俺は沈んだ気持ちで教室の椅子に座っていた。

まさか……緋香里が……一橋の娘なんて。

信じられなかった。

信じたくなかった。

——あの日、俺は帰るときに緋香里に尋ねた。

「なあ、そういえば、さ。言いづらかったらいいんだけど。緋香里は今の名字言いたくないって言ってたよな？ でさ、昔の名字ってなんだったのかな？ なんて思っちゃって」

「あ、それは全然言ってもいいですよ。私の昔の名字は……一橋……です」

俺は納得した後、逃げるように帰ってしまった。——

俺が座っていると、いつかの俺のように、潤が俺に話しかけてきた。

「おい、透也。ちょっとついてこいよ」

着いたのは屋上だ。

まだ朝会も始まっていない時間だったので、外は少し肌寒いくらいの気温だった。

声を出したのは、俺からだった。

「……知ってたんだな」

「……ああ」

俺はそれを聞くと同時に唇を噛みしめた。

これでこいつのこれまでの行動に自分なりに答えを出せたからだ。こいつは、俺のために動いてくれていた。

俺が何も話せずにいると、潤はゆっくりと俺の方に近づいて来て、いつもより優しい口調で言った。

「緋香里ちゃんから……聞いたんだな？」

俺は黙って頷いた。

「そっか………んで、お前はとうするんだ？」

「ど、とうするって？」

「とうするかはとうするかだよ。いや、とうしたいのか？　だな」

どうしたいのか？

俺はどうしたいんだろう。

こんなことで緋香里との関係を切るのか？

答えはNOだ。

そんなことはしたくない。

だって、あいつには”関係のない”話だから。

じゃあ、とうするんだ？

父さんの仇でもうつのか？

一橋が今どこで何をやっているのかもわからないのに……。

俺がこんなふうに自問していると、潤が俺に向かって言った。

「もしも……。もしもお前が望むんなら。……いや、ホントは言いたくないけど、お前が望むんなら……。俺は……」

そう言って一度大きく息を吸ってから言った。

「一橋の居場所が分かる」

その言葉の意味する事を理解するのに数秒を要した。

一橋の場所が分かる？

……それは、それは——願ってもないことだ。

そう考える心と、もう関わるべきではないと思う心が相反して俺の中に存在していた。

もしも俺が今一橋と会えば、間違いなく憎悪の気持で埋め尽くされるだろう。

例え一橋がどれほど改心していたとしても。

「どうする？」

俺はその潤の言葉にゆっくり息をした後、答えた。

——聞きたい。

潤から聞いた場所は意外な場所だった。

この町から少し離れたところに位置する、病院の一室だった。

ただ、俺はそこにまだ向かっていなかった。

緋香里とまだちゃんと話していなかったから。

緋香里に俺の過去を話していなかったから。

話す必要などないのかもしれない。

だって、緋香里にとって一橋はただの”いい父親”だったんだから。

だけど、俺は話す。

俺の気持ち。

俺の考え。

「よお、緋香里！」

いつかと同じように緋香里の帰りを待っていた俺はこう声を掛けた。

「あ、先輩！」

嬉しそうに俺に近づいてくる。

無邪気そうに。

「で、早速なんだが、少しでも話したいことがあるんだ。家、大丈夫かな？」

俺がそう尋ねると、笑顔のまま頷いた。

当たり前だが、家の中は特に何も変化していなかった。

前と同じ風景。

前と同じ配置。

前と同じ——写真。

「なあ、緋香里のお父さん……一橋の性のお父さんってどんな人だったんだ？」

俺の質問に少しきよんとしていたが、すぐに話し出してくれた。

「そうですね……。優しい人でした。人当たりもよくて温厚で……。と言っても、小さい頃の記憶なんて、当てにならないですけどね？」

そう言って、ペロッと舌を出した。

「そうか。……俺の知ってる一橋と同じだよ」

俺がそう言っていると、緋香里は驚いた顔をした。

「え？ 先輩の知ってるって……。先輩、お父さんに会ったことあるんですか？」

「……ああ」

「い、いつ？ いや、それよりも……今はどこで何をやってるんですか？」

緋香里は今まで行方がわからなかった父親についての情報を俺が持っているという疑問よりも、自分が気になっていた父親のことに
ついて、いっきに聞いて来た。

だけど、俺は冷たい現実だけを突き付ける。

「今は、病院だよ」

「え？」

「この町から少し離れたところの、この近辺じゃ一番大きい病院」

「ど、どうしてそんなところに……」

「入院してるからだよ。——この数年間ずっと」

俺のこの言葉に緋香里は明らかに息をのんだ。
色々な思いが頭を巡っているのだろう。

「な、なんで……」

「刺されたらしいよ、ナイフで」

「いや、そうじゃなくて……。なんで、先輩がそんなこと知ってるんですか？」

「そりゃ知ってるよ。だって」

——刺したの俺の父親だもん。

俺の言葉に緋香里は明らかに動揺を隠せなかった。
いや、むしろ恐れていたのかもしれない。

「先輩の……が、私のお父さんを……」

「やっぱり知らなかったのか。ニュースで結構大々的にやってただけど」

「……いえ、ニュースとか全然見ない子でしたし、それにそもそも母親も私に見せようとしませんでしたから」

なるほどね。

「そうか……じゃあ、俺の用事はこれだけだから」

俺がそう言っただけだと立ち上がると、緋香里は俺の腕を掴んできた。

「ま、待って下さい！ いきなり、そんなこと言われても……。せ、先輩は今からどこに行くつもりなんですか？」

「一橋のどこ」

俺がそう言っただけで、緋香里は震える声で言った。

「私も行きます」

一橋の入院している病院へは電車を使って小一時間程度だった。向かっている途中に俺は緋香里に説明した。

俺がなぜ一橋を目的にしているのか。

俺の過去を。

俺の考えを。

緋香里の家の時と同じようにショックを隠しきれない様子だった

が、黙って聞いてくれた。

コンコン

部屋をノックする。

もちろん返事はない。

中に入ると、延命治療の道具を付けた一橋がそこには寝ていた。俺の中には懐かしいと思う心と、憎いと思う心が入り混じった奇妙なものがあつた。

だが、緋香里にとってはただの”いい父親”なのだろう。ゆつくりと近づいて行くと、一橋の手をぎゅっと握った。

「パパ」

昔はそう呼んでいたのだろうか、まるで幼少期に戻ったような顔をして緋香里はそう呟いていた。

だけど、俺にはやらなくちゃいけないことがあつた。

「そこをどいてくれ、緋香里」

俺の声に緋香里はビクツとする。

「な、何をするんですか？」

「そんなの、決まってるだろ？ 俺の気持ちはもう来るまでに緋香里に言つたよな？」

俺の憎しみも。

恨みも。

「それは……でも」

「俺は父親が捕まっただけからの数年間、このことを、このことだけを
考えて生きてきた」

俺の言葉の勢いに緋香里はたじろぐ。

「そしてようやくチャンスが来たんだ」

「そ……」

「ここでやらなくちゃ、俺は一生後悔する」

そう言ってゆっくりと近づいて行った。

俺が近づくと、緋香里は少しずつ身体をちじこまらせる。

やっぱり、この子には無理か……。

俺がそう思いながら一橋に手を伸ばした時、俺の手は気がつく
別の方向に弾かれていた。

何が起こったのかと驚いていたが、緋香里の目を見た瞬間に理
解した。

——この子に弾かれたんだと。

「やめてください！ パパに触らないで！」

「なんでだ？ 俺にはその権利があるはずだが」

「そんなものないです」

目に涙をためながら、だがしっかりと自分の意思を持った目は俺

をまっすぐに見つめていた。

「俺の父親も犯罪者になってしまった。だけど、そいつも……そいつこそ犯罪者だぞ！」

「でも……」

「お前は犯罪者を守ることが正しいと思うのか？」

「正しいとかそうじゃないとか、そういうことはわかりません」

「じゃあ……」

「でも！ でも、それでも、この人がどんなことをしても、どんな犯罪を犯していたとしても……」

俺の目をまっすぐに見て言った。

「私のお父さんなんです！」

少しの間この場に沈黙が残った。
だけど、今回は俺から沈黙を破った。

「はは」

俺は顔がニヤつくのが止められなかった。

嬉しかったんだ。

だって、俺のしたかった事はこれだけだから。

俺の反応を見て緋香里がさっきと打って変わって、またおどおどし始めた。

「ありがとう、緋香里」

「え？　ど、どういう意味ですか？」

「俺は、本当はもう……一橋の事を恨み切れてなかったのかもしれない。潤にこの場所に一橋がいると聞いた時に思ったんだ。……ああ、この人はもう罰を受けていたんだな……って」

俺の言葉を黙って緋香里は聞いている。

「でも、あのまま恨みを捨ててしまったら、俺のあの時のショックも、父親の無念も全て無駄になってしまうと思ったから。……だから、止めてほしかったんだ。他でもない、一橋の実の娘であるお前に」

俺がそう言い終えると、緋香里もゆっくりと口を開いた。

「私も、本当はパパの記憶なんてほとんど残ってないんです。ただ、今の生活が嫌で、その逃げ道のために、”昔はよかった”って空想に走るようにしていただけなんです」

「……」

「だから、今日は自分の気持ちを確認められてよかった……」

そう言った途端、その場に崩れ落ちた。

「おい、どうしたんだ？ 緋香里」

「ちょっと、腰がぬけちゃって」

そう言って、ニツコリとほほ笑んだ。

この子はホントに、いい女だな。

そんなことを思いながら俺も笑顔でほほ笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2360w/>

past memory

2011年10月9日14時52分発行